

常山紀談

卷八

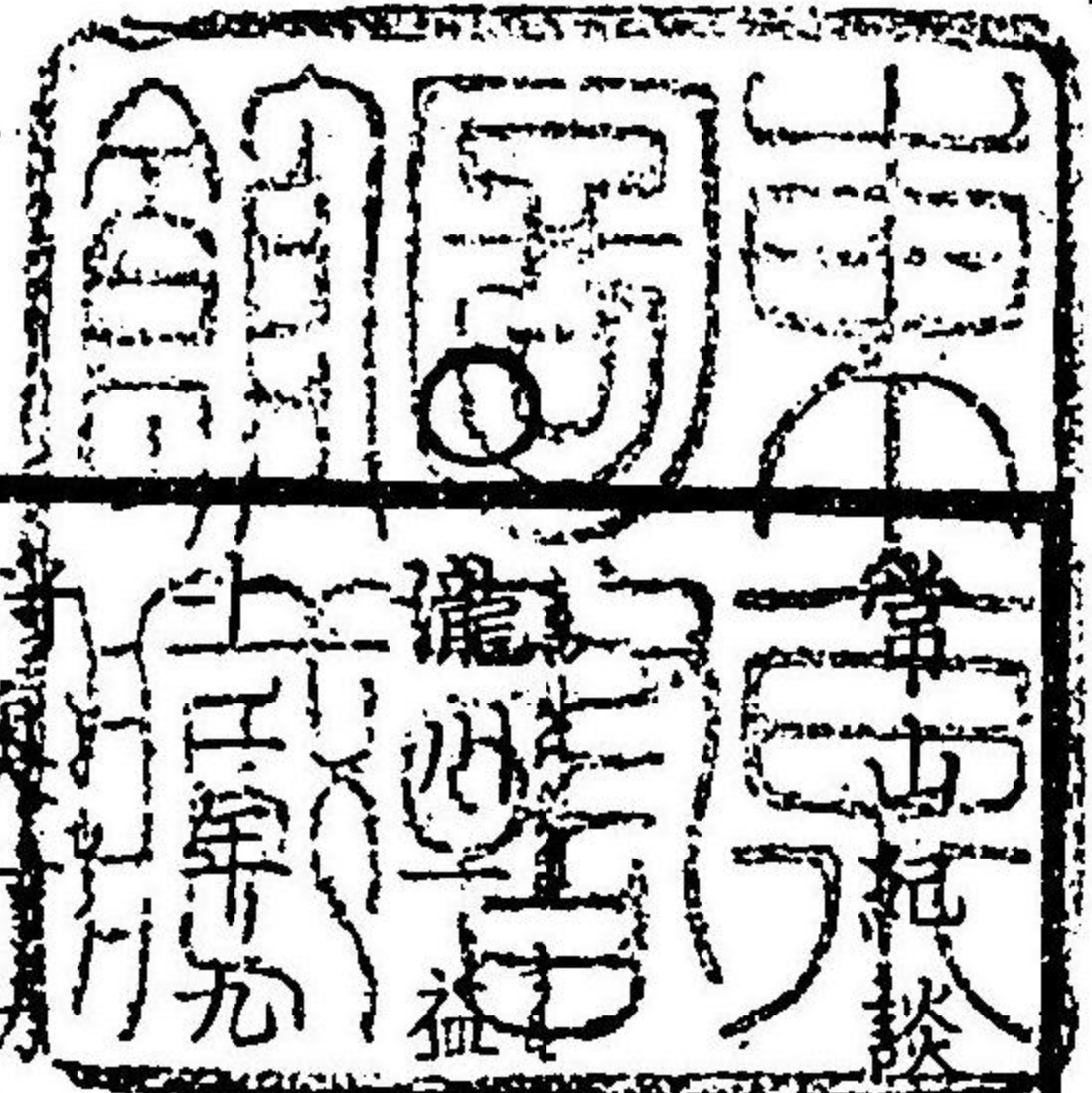
135  
15  
116

東 京 圖 書 館				
一 五 冊	二 六 號	三 架	四 函	五 類
				和 書 門

常山紀談卷之七目次

- 一 前田利家末森城後卷合戦の事
- 一 利家鳥越城と攻らる事
- 一 本多重次強諫の事
- 一 秀吉東照宮と和を乞ふ事
- 一 東照宮聚樂と秀吉公と御對面の事
- 一 本多正信遠謀言上の事
- 一 東照宮伊豆と北條父子と御對面の事
- 一 信長公平手政秀を惜みたる事附小瀬浦菴信長記太閤記
- と著る事
- 一 謙信信玄二將の批評

一甲陽軍鑑虚妄多き事



常山紀談卷之七

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

龍州益佐々成政等信孝と推崇く秀吉と弓箭を取一々天正

十三年九月成政八千の兵と率ひて加州金澤の城主前田利家の士大

將奥村助右衛門永福後日守る所の能登の末森の城を圍ひ成

政旗本を以て後巻を押し入るに攻る此城を打破り能登へ一

日討從ふ後巻の中乗取ると下知しけり奥村僅に三百

の士卒を以て爰を詮度と防ぎけり餘り強く攻らるるに今ハ

是まざる自害せんと云ひけり助右衛門が妻小袖と云ふに鉢

巻と刀を横へ女房の粥と手桶を入させ堀裡の人々自ら飲

せ昔楠とやん云一大将の日本國を敵として城を籠りしと聞

明日の金澤より後詰のいづき一つ夜防ぎたゞと云て打廻ると  
奥村見てゆくの振廻男子ふるまへに優まり此城と女の力ちからをもち得んも  
口惜し自負の色いろあり此城このしろを落おつゝつと見て火攻ひくわはせん  
と云者あり成政なりまさりゆく大手おほての城門しろかどを取て富山とみやまの城門しろかどと  
又石動山の衆徒しゆとも吾われの心こころと合あはせ火攻ひくわのまをぶらずと下知したして既すでに  
二三の丸たまごを攻取せて夜の明あるを待居まちり未森みもりより金澤かねさわへ行程いんじやう九里  
をまり其日酉きつうの刻ときに斯かくと告つて夜の明あるを堅かく守るべしとや送まり  
る利家りけ聞きゆあらる金澤かねさわの城しろの廣間ひろまへ出利長りけながを呼よんで汝なの城しろの苗  
守もせよと下知したせる利長りけながりゆく真先まきまくけ佐々ささを打破た破らるる残止のこりどまり  
らん事思しひもととやささくれむ利家りけさらば父子ふし打向うちむかひ敵此  
不意ふいと討うち利りありん軍兵ぐんべいと整とるる及およぶる馬うまを鞍くらぎ置るる

一騎いつきがけり打出うちだし一足いつあしも疾出はやるる今宵こんせうの功いさとを富田とみで與よ  
五郎ごろう後越ごごし汝津幡にづつぱんへ行いて不破彦三ふなひこと未森みもりの後卷ごまき比先手ひさてせよ  
としと下知したせる富田とみで巳み宿所しゆくじよに馳歸ちかへり馬引出うまひきだし打乗うちのり諸證しよじやうと  
合あせくり行いり利家りけ士卒しそを汁じゆとり飯いとと物具ものぐせる  
る庭にわに黒くろの馬うまを引立ひだり利家りけの北きた方かた後ご芳よし三さん方かたのしと入いり  
父子ふしに参まりをりを叔人おし々々聞きゆ我われの利長りけながの母ははあり今日けふの後卷ごまきを  
誠まことに大事だいじの軍ぐんありを各心おのこころと合あせ功名こうきやうをたるる未森みもりを敵たり取とれる  
へ各達おのたも討死うちじしたまへ我われも人手にんてよりひままりとり利家りけの側近かたぢ  
進まり未森みもりと敵攻落たかし討死うちじせるをたるる利長りけながも母ははが此詞このこと  
と能聞よく生死しんじの別わかりを利家りけあり心こころや成  
政なりまさと打破た破ららん事こと必定びやうていとしひもあらる物具ものぐの上うへ帯おびとを結むすぶる

端と切て捨て馬に打乗る父子の兵五百計に過ぎりけり利家馬  
 上り味方の小勢の吉事あり佐々か思ひゆき過ぎる所切てけ  
 り打勝つて奥村討せり生かひる一と言つ津幡の町を北へ打  
 過きらるる時富田乗來る津幡の金澤より四里餘りの行程あり  
 利家汝れが寝て有けりぞと罵らるる富田聞て津幡に馳付不  
 破の門を叩き申渡し不破物具着ていと見て打出ぬるや門外  
 旗と指出しむひぬ何國より寝申べきといふ利家尚聞入とぎう  
 富田怒て其日の一番槍を合せけり是利家士と激まるの術ふ  
 らへ利家の士卒追々馳付けぬ三千餘り成ゆると二陣に分  
 一陣の敵の後を打り一陣の敵の旗本を突てくる成政軍兵疲  
 し上思寄る所奥村も門を開き打て出ると成政大に敗北せ

り是天正十二年九月十一日の軍あり後聞成政山の尾崎と  
 越敗軍を集め陣を立直り見り今前田といふ男が勝り乗陣を乱  
 しくるり來るる大返りといふ利家と打取ると物見二騎を  
 出せしが乗歸りて敵の城を後より静りくるり來るべき物色  
 ひつと成政謀違ひけり

未森後卷の事加越合戦記に見へる處大同小異を詳る故併  
 せて爰に記を利家に加洲の内石川川北能登全州を治め金澤  
 の城に在り成政の越中の守護を新川郡富山の城にありて越  
 中立山は越の難所と僅に從者百計を忍びて打通り東  
 美濃へ出秀吉と織田家の弓箭大敵に勝つてかむ成  
 政北國より攻登りて前後より挾打て秀吉と亡らんふ加賀能

登越前三州と賜りて信雄と相約しきりく越より富山  
に歸り佐々平左衛門神保安藝守と相計り成政の二人は女  
中一人の秀吉へ入質し出し置し其妹を利家の二男利政  
と妻とくさ由と平左衛門とて言せしる両家縁と結び日出  
度とひらけり天正十二年七月廿三日成政の使佐々平左衛  
門金澤に赴き祝ひの物取揃へ相贈りたり利家篤實の人あり  
成政の奸謀有るあり引引出物して悦しの上村井又兵衛と  
謝禮の使とせしる成政八月の忌ひとて延置夜々北の櫓より  
軍評定せしきけり心付て密に利家とありし者あり利家  
虚實辨へりしとて不意の變に打負ふが弓箭とる  
身の耻辱ありとて加越の堺朝日山に城と構へ村井又兵衛と

大將とて千五百餘り守らありし柵と付廻る處に八  
月廿八日成政より佐々平左衛門前野小兵衛に五千の兵と指添  
て押寄り加賀の者ども居住の支度せんとい金澤に歸りしな  
も有て折節七八百の過ぎりけり村井大剛の者も  
味方を勇り立る處に利家馬廻りの士阿波賀藤八江見茂十郎  
見廻り参り合せ急ぎ歸り注進を頼み云ひに  
人色と變り金澤にありとも斯うと聞か馳來るべきと参り合せ  
幸あれ然るに空しく歸りし事や有と怒りけり  
村井聞て誠に頼母しきこと悦び餘り有但し路次を一揆起  
りあんは必定あり各歸りに恐あふ爰に止らねと云しを  
人此詞を聞かぬ路の一揆を恐る歸るまじと云はけり

申さんとき馬に打乗り金澤へ四里半をりある道と只一時に馳  
帰り斯と申せを利家きき後巻せしむ不破彦三田野村三  
郎四郎片山内膳岡嶋喜三郎原隠岐武部助十郎あまを打具  
貝を吹せ揉よんやぞ急がれける折しも大雨降し成政の兵も  
一時に攻破りけりと思ひけん城を攻む引帰しぬ是より  
和談破まけれは越州七尾より利家の弟五郎兵衛安勝同孫左  
衛門良継高島織部中川清六長九郎左衛門等三千餘をりめ  
置法登加賀越中の境末森より奥村助右衛門より千秋主殿助土  
井伊豫と添て千五百計をりれり加州津幡の城より前田右  
近越中の堺鳥越より目加田又右衛門丹羽源十郎と籠られり  
成政も俱利伽羅の山領に城を構へ佐々平左衛門二千餘利波の

城より前野小兵衛より二千青山の城より國士菊池伊豆守荒山  
に城を築き神保安藝守氏春の家老袋井牟人より守らせ七尾  
の押より神保へ成政の軍より四千の兵をり森山と守りけ  
り利家斯と秀吉より告らるれば秀吉聞て佐々を疑ひ加州に  
又左衛門を遣つる吾謀り違はざりけり利家兵少しとい  
へども必成政一切勝へ傾て師を出し成政を討亡むべきよ  
と使者より黄金三十兩與へりぬ九月十一日成政末森へ押寄  
せ二里計をり坪井山に切所を前し當て陣し佐々平左衛  
門山下甚八前野小兵衛と始し八千餘攻よせ外構の町家  
に火をうつんと土井伊豫敵の町家を焼く生かひあしと  
て二百計より突て出散る戦ひけきも大敵より合せ終り

討死を城兵も爰を専途と防ぎけり間速に落せりと見えず  
しつ成政後巻心元ありしとて神保安藝守氏春より四千餘を  
差添て川尻といふ所を陣しく加洲の道を塞ぎし利家未森  
より告來ると等しく金澤を打立不破彦三村井又兵衛を先  
陣とす

一説に成政きびしく攻て二三の丸水の手を乗とり本丸を攻  
詰り未森の飛脚息切るをりし金澤に馳來り文箱を投げ  
けるるを

十一日未の刻に事あり未森の水乏し廣岡の水を汲てきり  
入を急ぎ追付し後巻の土産せんとして下知せしむける借同國  
松任といふ所金澤より三里計隔り利長居城ありしを

未森へ向りし言送られけり金澤より四里許ありけり津幡の  
城へ急ぎ押付られし弟の右近秀繼廓外に出向ひ利長を  
待るべきやといふれし城に入きし利長成の刻なりし津幡  
に馳着きたり利家悦んで吾成政と若き頃より数度の軍あり  
つし非も利家を越しし事一度もあはれはれども成政悔ふま  
し非も無二無三一合戦し勝利を得ん事掌の中より  
ありと大音揚て呼り勇進まれけり寺西流兵衛入道右近  
と相議しや未森の落しめんと殊更川尻に神保多勢と  
道と切塞ぎし聞えし後巻のいひをんと申利家大に怒り  
きし諫め必口より出さまじきとぞよ人の一代名に未代  
にこそまけ奥村や土井を捨殺し已來とて日本力主とある



とら此取辱まゝに成政大軍もあはれ吾馬廻り計も  
も快く軍しく勝負を決せん事不足多し村井汝如何  
思ふぞ是非一戦と思ひ定めし詞をうけり又兵  
衛聞もあはれ有無の一戦比外何の是非言ふ利家悦  
んぐ村井が心も吾も同く早打立まゝ右近茶漬飯を進  
め且上手比占師の山伏比召て軍を占せられんやと問利家  
氣色もねと夫々呼出させけり五十餘の山伏も懐  
り書物を取らぬ利家もあま後巻に決定し能見よと  
山伏書物を懐に入さ今日吉日あり時も吉時ありと  
利家汝功者あり頼て打勝賞美まゝと快げ打出勇  
に進んで押行まけり村井不破先陣原隠岐前田又次郎片山

内膳二陣田野村三郎四郎青山與惣兵衛近藤善左衛門前田慶  
次郎押續く宮川但馬武者奉行と川尻の二里計  
高松と所より利家曹を取て着忍びの緒に餘り切て  
捨らるる今日を限りの軍も人々生て帰ると思  
ひ由りて篠原勘六と利家の近習比士二十三と成り横根  
と頼ひ起臥も心任せざれども是非打立まゝと汝に残  
り留りて吾討まゝ堅く城を守りて秀吉の後巻を待ひへ叶  
ひ其時腹を切ると下知されし残りけり乗物も乗與力比  
士二十騎打具一川尻近く成て馳付篠原勘六参ひぬ大音  
呼りければ是を聞人々天晴剛の者ありと云あへり川尻より  
津幡入人を付てうらひまゝ馳歸て前田父子津幡まで出

れども後巻有る見づと聞くを聞て神保の大を備とゆるり  
けり利家先陣に乗行て村井不破の演際と一騎打馬の舌  
を巻せりゆり静と押通し下知せる神保の兵と押出し待り  
けり物見の言く又富田越後門を物見とせり馳  
歸りて敵一人もひづ川の杭の多くひと人に見誤りたるらん  
とく押せられしと申を利家川杭と何を證とせん問わ  
る越後さむむ武者あを並びの揃ひと有まると存猶と慥  
に見ん為り川中まで馬を打入と心静と見ては是を見損じ  
程も再び弓箭へともまるとや利家汝が見る所を正し  
士の手本とせよと悦びて諸兵を進りて押通る神保是  
ハ夢も知む後まて開付ともども利家の今演としける右の上へ

ある山と兵と押付陣せられし夜明ゆけり利家馬を乗廻り兵  
糧を遣ひて今日の軍勝ぶたると心易うと下知りて  
馬より下りて笑う見ゆ利長七八百計両先陣千三百計旗本  
千五百の過ぎり利家けり軍の功名せん輩の取分て賞を  
べし若討死せむ必子孫を見放さざると高らると下知せり夫  
より山を下りて兵を進む道二筋あり一筋は末森の道一筋  
は成政旗本への道あり村井坪井山へ押寄成政を虜とせんと申  
利家聞て尤も成政必嶮と前も當てや陣をせん只末森  
へ馳付敵を追崩し城中の者ども力を付んり村井承り  
可然も城中の士ども只今の仰を承りさぞ辱がんとしり程  
るく末森近く押詰りて村井が者ども餘多首を取來る末

森らの二の丸を籠りしる千秋主殿助瀧津金右衛門已下寄手攻  
 入るを追出り力の限り戦ひけり討死餘多し及び本丸も既  
 り危く見ゆども奥村助右衛門少も氣を屈せざ支戦ひけり  
 處に砂山に當りて朝霧の晴間利家の馬印見えしを力を  
 得勇々悦ぶと大方も今少し後巻遅るせむ城陷るべき  
 と運を聞きし偏り利家神速の兵機を得らば故もつり村  
 井又兵衛田野村三郎四郎を始とて槍を打入と散々戦ひけり  
 が成政先陣の大將佐々與左衛門と村井突伏けし士三十餘  
 人枕と並ぶ討死を利家の先陣佐々と討取開を作りけり  
 崩せしる寄手敗北し利家見て搦手へ廻りし寄手も  
 も究竟の兵餘多右て待りし利家族本五十騎も静し

つりしる所半田半兵衛真先も一番槍と名乗けり所を櫻甚  
 助鑊砲うて打つし左の手も當り槍を抱て倒し半兵  
 衛と甚介ハ從弟あり指物も見知ける故甚介も半兵衛も  
 らくむ不便なる事をあきらめ涙を流しけり後聞えたる  
 とりや利家敵の鑊砲烈々延々せば叶ふまじり追  
 崩しし金の切裂の再拜と取て下知せしは會釋もある  
 競ひりて押崩を寄手餘多討まけ敗北せし金澤の士勝  
 鬨とどろき上りたる利家城中に乘入て奥村をとり詞と  
 うけ今度籠城の勸言語の及ぶべきよしあは利家いふおめを  
 も汝がしひ甲斐あるて城を明るん又攻落さむを口惜うべき  
 しく功名やあるといきり立ちらる其時野村傳兵衛山崎彦右

衛門一度、槍を合せるとく一二の争論せり、利家半田、真先  
 がけし、其如く深手負志を遂さむとも、勇士の志、頭われ  
 うり二士一同、槍を合せるとも、傳兵衛名乗とまじ、一番、其  
 村、極めたるごとく、下知せし、二人、千石の加禄を與へられ、  
 そ半兵衛、疵い、二千石與へ、士十五人與力、付り、成  
 政の旗本へも、後卷の、聞え、一軍せん、と、八千  
 計押出、利家は、是と見、此勇り、勢、百万も、  
 先陣へ、又兵衛と、二陣、城主、奥村三番、不破彦三と  
 定め、能州の國士長九郎左衛門、四百計、馳來る  
 敵味方分明、物見と、長ヶ兵、遅く馳付、  
 口惜き事あり、弓箭の眞理、盡くと、憤り、物見の脇田

善左衛門野村七兵衛、聞て馳歸りて、具、利家長を感ぜ  
 う事大方、皆と、長ヶ志を褒立、  
 非び、洩る、誓紙を添、書を長、與、成政  
 い、思ひ、打出、兵を引、山、添、引退、折、武  
 者修行、來り居、本多三跡、無二無三、りて成政を  
 討取、云ひ、猛將の成政、手、引拂ひ  
 入々言、付慕、止、けり、討取首七百五十三  
 と、聞、利家の成政城を攻落、空、引返、怒  
 り引退、体、津幡の城へ寄、計り難、奥村を城、  
 止め、兵を餘多指置、末森を打出、追々、兵加、一  
 計、成、けり、又不破村井を先陣、濱邊、指、津幡

馬を入さしれども成政ハ津幡ヲ押寄せし引取り佐々  
カ軍兵金の比ハの指物ハ坪井山ハ曜きつて見入る  
と利家打詠めあそむ見事ある備立ノ頭て成政を攻亡我  
士卒ノ指さす言ハ秀吉此勝利を聞日本ノ比  
類少き武功と賞せしめりや利家奥村ノ其日持せしめ  
馬印金の切裂の再拜着らる甲冑を賜りて賞せしめとい  
へり

天正十三年四月八日前田利家金澤と打出鳥越の城へ押寄らる  
鳥越の城ハ金澤より約二兵を入置し去年末森の時城をあけ  
退て成政の軍兵入替り守りけむ利家は是を憤りて攻落さん  
と此志あり城兵も久瀬但馬守其外撰る者とも五百計門を

開て突て出利家の先陣を追立り利家ハくさる山の尾崎ノ陣  
馬と立ち味方敗北を見て山崎少兵衛ハ如何と云ふや  
返まき監合ある言も終らぬ白き羽織ヲ進出する者の  
ひくし利家山崎出さる早味方勝ると言まらる旗本の  
早りをの者ともけ出んとまを敵の勢競ひ懸り足ノ踏止  
る時今少し待りて下知せし徳山五兵衛只今槍を合と  
と見えり地煙立いと云けり然る近邊の越中比兵城々より助  
来て敵の陣ハ黒くけし山崎ハ與力驚津九藏と名乗槍を打  
入らう早く左へ九藏危しと云ふ山崎静と云詞  
の中ハ九藏倒しを見て山崎進出て槍を打入押崩し  
城際まで追打し城兵門を指固けし利家強て攻む

引返さざらん此軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居  
ころ成政馬廻りの将杉江彦四郎と組打して谷へ落組し杉江  
刀又手をとらるる處より下より少藏小脇指を具足の鎖のちぎりを刺  
通し刃返りけきとも氣つれて首を取ると得ざりし片山内膳が  
従卒來りて少藏を押のけ相討と云て首を取つり利家細中より  
事を糺明し少藏が功名を定り勘氣をゆるし鞍置馬を與へられ  
けり

○

天正十三年三月東照宮濱松の城より疔を病せむ近習の若き  
人二膿を強く押せたまひしより痛甚しくたまふ事切きやあふ  
と城下よりあける程の事ありけり今いふや思召けん御遺言を仰  
出さるる本多作左衛門重次参りて先年臣を療養せし糟谷政

利入道長閑が薬を付させしよと申召入させたまふ  
りし作左衛門大に怒り殿を徒ら死しつらんよ此作左衛門の年  
老ぬき只今自害し待奉る座を立じを御覽し  
作左衛門氣狂ひつる未だ自害とい何事ぞ吾も  
ん後こそ大事も仰らる時作左衛門夫の人よりこの  
若き時より幾度と軍場の数所の手を負世の中の崎と  
崎の身一人より今日まで殿の御情を人かましくも  
只今殿過させらひる北條と始とて敵國より攻來らん殿  
おき奉りし軍は者やひる國の忽滅亡す其時  
作左衛門の路の邊に餓死せんる人かましくも徳川家  
公せし本多作左衛門よ何を頼まはる人よ嘲り笑へる

づー近きころ武田の内より甘利殿とて人の敬ひたる人も武田の運盡  
ねまふ今へ本多平八郎が組となりて居るを見るも哀あり是の  
人の上より勝頼の不道より減しつるも殿の薬をきりひたすや  
同一理よひとす甚東照宮尤より長く長閑を召頼て薬を奉り灸を  
大より作左衛門も急奉りけり夫より痛みや軽くするを大より  
ひまひ作左衛門聲と上泣て悦びりとぞ

○

天正十四年正月秀吉織田源五郎長益羽柴下総守勝雅天野佐  
左衛門三人を使とて東照宮と和平を乞せけり三人帰て和平  
おのひもよろむ重て来りて首を切んと徳川殿アされし由ア入る又  
くさぬく三人と三河へ遣し強て和平を請せり東照宮三河の吉  
良より左の手より鷹を居させめりて三人御對面あり三人カシける

信雄卿の厚恩を忘まふのこころはひりねども秀吉計畧し瀧川  
三郎兵衛と羽柴の姓を與へ下総守より神戸の城主とて三万石  
の加禄し其外數多都し妻子を置自人質とよりひひぬさまぐの謀  
りつべ此度和睦ひりねい秀吉軍を出し清洲より勢揃して打向ふ  
べきころ四國中國の兵も相加りて去々年小牧の時より兵十万余  
多りつづゆし事よひとすけり東照宮聞し召去年十一月  
伊勢の奈合より信雄卿と和平の時より方よも已來別の事あり  
ふと云ふころ我とつづるの謀より吾家の石川伯耆守より十萬石  
與へて我より背くやう吾弓箭を取て發向せんと思ひしころ織田  
殿の國と打過て軍せん事しつと怒を押し止ぬる無礼の事  
どもあり秀吉清洲より勢揃せんことを望む所あり鳴海表より下

軍まのらづー然らば東美濃一打出土岐遠山惠奈三郡と  
切取づーとむちを指上らば此鷹下もとて手配まづーと打  
笑させぬへ三人帰て秀吉一くくすの秀吉聞てさくも大勇  
将うふ今夜思慮まづーと言ま一時丹羽長重進出必軍の思召止  
りぬ長重が士ども刀の鞘袋と設一故子細と問一鞘一三まき  
を持へ合戦の時ハ鞘袋と捨て三河武者一紛と命と助るべき支度  
ありと申も果ぬ蒲生氏郷堀秀政もさく士卒其心得一は万一  
一も利ひまどとりへ秀吉よりく徳川家を打破く各見せん物  
さく止りけしと三人退出道より彼猿ハ死所さく物狂や  
と私語と一翌日諸将をちりめ三河と打滅さん安けれも智勇の大  
将あり吾日本を治むべきことを相談せん為一縁と組妹を嫁して和

平せんく又三人をやさく東照宮三條の誓文を御所望さく秀  
吉許諾く和平に及せむひく四月秀吉の妹濱松におくま  
後一京に登らるめつぐまむねを秀吉請て秀吉の母大政所て質とせ  
ま一都に登るをなまふべき一定めり長臣ども是ハ危きことあり然  
るく由諫めやさくも聞召入たまりを其時やけく和平又破ま  
秀吉攻来りひとも素より鋒先の強き言うや及ひなき何十万比大敵  
ありとも打負ひま強て思召止りたまへとすけく東照宮聞召諫  
る肯尤理るされども秀吉一畏ま行ふあり日本久く兵乱  
く四民安堵せむ此項や治るる復秀吉と弓箭とくわりの  
世うら静謐せん只く秀吉一対面して日本太平の基とせん若危難  
に及びるんう万民の命を替らん何れ惜くえきく九月廿日濱松と



御首途有けり定りけり人々廿日ハ四ケの悪日とて千人出て一人も不帰と申傳へ一日御延引然るべしとや東照宮千人行て大事あり我今度一万二千の軍兵を引具へ上京を此軍兵一人も生て帰らぬ吾為の大吉事ありと仰らるる井伊直政を御留守居とて此度若秀吉詐を構へ変え及ぶる危く尾張大納言信雄ハ必吾告知甘味方とて丹羽五郎左衛門ハ秀吉恨あり心合めん其外吾志を寄る人多し去ども我亦其備ありんや秀吉不意に謀をあらわす京都に火をけり東寺に槍籠へ其時素より立置たる汝組一万と五百づ二十分ち外に酒井神原が今度京に上る供の外留置する兵一万是も二十分ち佐屋の渡を越千種を押し上る若大津も支るる武田四郎が長篠も懸り如く

切て上方武者一支りまた又瀬田の橋を焚き宇治より攻入り新七箆之介と云角力取二人の宇治の案内者召具まじ斯の如く秀吉聚樂と退て大阪に引取んと東寺と清水と兩方より挾て打破らん一恐るる足む秀吉詐妄の謀を多し吾天下を掌り握るる兆ありと仰らる御出馬あり秀吉と御對面事故あり歸らるるひりきまを危く召らるる故に万民の命を替らん御詞天地神明も感應して遂に國運を永世にひき世たまひけり

○

東照宮聚樂より秀吉御對面饗礼有けり日秀吉白き紙子の羽織に繡を著らる蒲生氏郷其頃三十二歳に於て紙子と名付呼ばる

浅野弾正長政彼羽織を御所望し〜と私語けり。東照宮漫  
 二人のものをひらき事ありと仰あり。長政又御所望しひらき。秀吉  
 大に悦み。素此羽織の物の具の上に着んと。設るを一旦に  
 辞し。やきんと強く乞得させ。秀吉何事の悦は是に増るべき  
 と。ちひなき。東照宮止事を得て。許容ましく。けり。諸聚樂の城  
 門より毛利浮田と始め居並び。拜謁し。茶を奉て。後東照宮  
 彼羽織の事を仰出され。秀吉悦び。手づら。着せ奉り。扱大名  
 に向ひ。我の物具させ。まじとの事あり。や。誠。天の具加。叶ひ。る  
 秀吉あり。と。語。き。けり。東照宮歸ら。ひ。後長臣達。聚樂の  
 事ども御物。あり。けり。時吾。羽織を贈り。後秀吉吾。物具さ  
 せ。まじとの志あり。と。諸大名。向ひ。云。まじ。斯る後。争。秀吉の

鋒先。向ふ。と。中國西國。語り。言。つ。く。普く世の人の口。あ  
 り。筑紫の末。も。聞え。ん。是。天下の大名。威。を示。す。謀。畧。を  
 其。遠大の謀。輒。測。り。あ。は。し。力。を。以。て。是。を。推。ん。と。ま。り。及  
 り。秀吉あり。と。吾志。を。所。別。有。と。仰。あり。けり。  
 太閤東照宮。饗。礼。有。り。盤。を。始。り。器。不。殘。菜。の。御。紋。を。蒔。繪。り  
 誠。美。を。盡。し。る。次第。あり。と。東照宮。本。多。正。信。の。語。を。せ。た。ま。ひ。如何  
 多。思。慮。や。あ。ん。吾。も。亦。遠。き。慮。有。り。と。仰。ら。し。正。信。承。り  
 され。ん。小。笠。原。與。八。郎。氏。次。ハ。勇。將。の。譽。を。世。上。に。聞。へ。り。と。旗  
 下。の。内。々。の。志。ハ。信。長。と。朝。倉。と。一。戦。あ。ん。時。必。三。河。に。御。加。勢。御  
 出。馬。あ。ん。其。隙。を。ひ。御。家。の。領。國。ハ。己。の。掌。の。内。に。握。ら。ん。と。存。ひ

て偽て二心あり有様よりひり彼が計り如く姉川の合戦信長援兵  
と乞まり小笠原を先陣に命ぜり故心中に決ひ所ありしに  
め辞まきまきするに姉川にて御勝軍より小笠原より二心あり  
見えし御乗あり御心に乗せし所あり故姉川の先陣小笠  
原と御定有て彼が支度相違せり人の乗る所をのりし物  
有ては乗る處を乗るに心ありと善く豊臣家の乗る所を  
右の謀りありしにせらる事ありしに申せし東照宮尤あり  
と深く信りかきつけし

○東照宮の御女を北條氏直迎へて兩國和平ありしに御對面ありし  
に天正十四年三月使をりて拜謁し要害國境の城々守りの兵を  
輒りて黄瀬川を渡り伊豆に至りしに仰遣はし酒井忠次

黄瀬川と越氏政父子の御對面ありしに北條家の旗下より同  
ト事ありしに今徳川家の五洲の御ありしに北條家の旗下  
屬より徳川家の瑕ありと諫め申し東照宮より其位争ひ無益の  
ことあり過り頃武田上杉和平して犀川を隔て對面の時馬より早く  
下りし方旗下より似しと忽事破れ其場より銃砲と打合諸卒  
血より深く相引ありし其時信玄廿七才謙信十八才の時あり夫より  
和平して京より上るに信長も吾も争う支へ得べき其故に兩方より  
使を以て道理至極せしに兩將廿四年の間和平せしに  
其中に信長の近江和泉を打從へ吾も援を出して信長を後より根を  
深くするの謀をせしに信玄死して勝頼父に優るべきと威をふるひ  
暴逆より滅亡ありしに信長又勝頼に勝りて驕長と様々ありし事の

之有て終る弒せしむる斯の如き大将ハ滅て終るべくと理あり  
夫と見て戒とせし位争ひをなすハ悪きことあり 氏政吾と二心あり言  
ふるんハ両旗より東國と打平けらん其時及て州あま領を  
者上座ニ在ん位争ひ更ニ益あるきことありとて伊豆の三鳴より氏政氏  
直ニ御對面あり

○

信長弓箭盛るる畿内と打從て頃近習の者とも詣て斯強大  
ニ及びせむ事を知りて平手中務が自害しけり短慮とてひとしけり  
信長怒て色を變じ吾斯弓箭を取る事ある中務が諫めて死せし恥  
悔て過を改り故より古今ニ例なき中務と短慮ありとよ汝等が  
志無下ニ口惜き事ありと言ひしけり

小瀬甫菴後ニ此事を傳聞て信長記を編むる己前あり必其中

ニ書入る事と遅くきく残多しと言ひしけり 中務大輔政秀  
ハ備後守より信長の傳ニ附らるる信長甚よるぬこと多し  
を度々諫争ひて後國の亡ん事を料りて一封の書を留置て自  
害しけ失るる世ニ普く知るる具ニ記さば中務始ハ清秀  
と云け故諸書より清秀と記し後ニ政秀と改め  
け故諫死の後信長尾州名護屋ニ一寺を建らし政秀寺と稱  
し寺領二百石寄附せし臨濟開山派京都妙心寺の末寺とて  
中務の墓も其寺ニあり寺の縁起ニ政秀葬送の時信長柩ニ手  
を懸らしたる事 記せり小瀬甫菴ハ町醫りく加州金澤ニ居り  
利家の臣横山山城守長知の許ニ心安く常ニ來て毎夜伽し  
り長知ハ尾州の人とて織田家のこと能く覺へし故信長の

事と甫菴毎夜尋問且秀吉の事をも問けり故長知或は委しく或  
はあまく語り聞せむるを甫菴退て書記し信長記太閤記二部  
の書を著し世上へ出しゆるを長知聞て信長太閤の事を書記さ  
んふら尋問せんふ答ふんやうのあふき遺漏も多し残多きこ  
とあり其事を聊ししむる依て只一座の物語と云ひききせらる  
と其儘に書著しつた今に於て甚遺憾あり甫菴馬鹿者多  
く長知ゆひしとせり長知へ初浪人ゆく叡山に寄宿し諸國を武  
者修行しく後前田家へ仕へ大膳と云ふ加州大聖寺小松越中未  
森らふの軍に武功有て一万五千石領し其後同州大田但馬守  
と放討させしもの命を受太田禄一万五千石を合せて三万石與へ  
らる長知大力の人よく人の勇武をさめし目し掛む大方の事し称

美ゆせげ只武士の有べき事と心得たり故甫菴に語りける事  
遺漏多く悔しけることぞ

○ 信玄死し事を深く隠ししる北條氏政泄聞て謙信のゆき告げ  
やせけり謙信は春日山よく湯漬飯を食せしきし是とき打驚  
きて箸を捨飯を吐出し英雄と此人多し關東の弓箭柱を失ひ  
うらとく惜まきけり信玄の将畧の謙信に及はざる故に高野の成  
慶院よく大威徳明王の法と修し謙信を呪詛せしき其文今に  
高野山に傳えりけり

信玄勇才の人と超えりと称まき父を逐ひ子を殺し降將を殺し  
く其子と妾と一其餘不仁怨毒算へ盡まべりむ姑く此二事と  
併見て二將の賢否論をまきしり明き又甲陽軍鑑に記

るせし處附會詐偽多しと拵へ設け信玄の悪を隠し他と蔑し  
せしは是又く盡まざる一事を擧て論むる北條家と  
戦ふぐく利ありと見えざるも北條五代記に記せし信玄川  
中嶋に陣せし氏康夜討して甲州の兵敗北し八幡と書する旗  
と捨て甲州へ逃入ると見えし甲陽軍鑑に是と忌て津浪に  
旗を取らざると記しし北條五代記の説誤りなりといふと  
も津浪に旗を取らざりし陣所の地理よくききあはるや

○甲陽軍鑑と高坂彈正書とて世に傳ふる事久し勝頼に仕へ友  
野大膳武功の人よく甲州の滅て後引り隠し居り書する物に  
ハ香坂と記すり姓名も違へり偽妄多き書ありといふも軍國の事情  
をよく書取る故に其虚妄を人疑ふに控弦の家專讀べきものと古

人もしりし然るも其事實を案し其真偽を考へざる大に惑は  
ざるんて必然あり川中嶋九月十日の合戦の事其記せしはよく  
是と論むる信玄の敗北とて疑ふるに卯の刻に始りし越  
後方の勝己の刻に始りし甲州の勝ると記す軍に芝居を踏へ  
る方と以て勝るとする事甲陽軍鑑に論明白あり然るも其日の  
戦信玄芝居を踏へりしは既し山本勘介が其軍を  
豫めしりしは二万の兵と二万二千謙信の陣西條山へ指向し合戦  
を始りし越後の軍勝ると負うるも川と越退ん所を旗本組二陣  
を以て首尾と打んと謀りし然るも謙信客戦する故にあの  
ふ程利を得しは越後へ引返る極りしは是主戦の敵に  
勝るといふと空しく其地よくききあはるを以て是を以て

信玄芝居を踏きたるも、勝つていふべからず。一ツま  
信玄芝居をふまへて、言はくまうや甘糟近江守犀川を  
うけて三日苗りてを甲州より押寄て軍をさへつらさるは是  
越後の軍芝居を踏へて、あつたや、是二昔老人の物ごとく言傳  
事あり信玄嫡子義信を殺さるゝ繼母の讒言有し、いどの其實  
へ川中島より信玄義信將机換りて、信玄へ廣瀬の方へ引退く  
敗軍と申し、義信を捨殺さるゝ勢あり、故義信深く恨み、ふ  
くむを以て終に不和に及んで殺さるゝに至る。信玄其場を  
踏むこと能はざりて逃るゝを以て芝居を踏つて、いづまや、是二謙  
信素より甘糟をりて川を渡るの後殿と定めり、三日苗りてを  
以て見まへ甲陽軍鑑に甘糟が兵散乱せし記せり、虚妄なること

論と待む甘糟三日芝居を踏つて、謙信何事、狼狽しく主従二  
人高梨山に懸りて走らば、謙信既其前夜軍評定あり、計  
り、如くある旨甲陽軍鑑に記せり、所明あり、初の合戦に打勝つて  
己の刻まで徒に敵の歸り來るを待て敗走さるゝや、謙信の弓箭を  
とる。越中の戦ひの父の吊ひ合戦あり、信濃に師を出まら、村上義清  
に頼み、其求に應じて是を救ふあり、相摸の軍に上杉憲政の來  
るを容て己事を得さるゝ、故に其詞も強く勝敗を見らるゝ、いづ  
當る所のあきや叶はざるの戦ひとある。信義を守ると大將  
の可慎事、せり、爰を以て深く頼らるゝ、始終約と人を又其兵を  
用ゆる信玄の可及、あつた山の根比城を攻落せり、信玄氏康兩  
旗より後援さるゝ、能く遙々と敵の中を旅行して京都に赴き

ころも勝る事ありや信玄の謙信小田原へ攻へし跡に付てあし  
 ころも安きころむや甲陽軍鑑に長沼の城を築きし時判兵  
 庫に信州水内郡より百貫の地と與へ信州戸隠より密供と修む爰に北  
 越の輝虎譏臣と企て此次きとて見えどころむを永禄十一年謙  
 信戸隠山より謙信と信玄元詛直筆の書を見て打笑ひ弓箭取る身  
 の恥より末代の宝物よせしと神職のしるし由語傳ふ今其書紀州高  
 野山よりしり事詳し書記せる物あり實に謙信と恐る事虎の如し  
 ころむころむや村上義清再び信州に歸り入しころむ甲陽軍鑑に載む  
 ころむも永禄年中信州の中四郡謙信に屬し義清と信州へ入らむし  
 事記せるものしり甲陽軍鑑に長坂長閑跡部大炊助二人と奸曲の  
 臣として勝頼寵せしころむと深く憤むころむころむころむ二人權と

取る勝頼に始まるころむを信玄の時より寵せしころむ故勝頼に至  
 ころむ愈權威ありき信玄の時北條の兵に跡部敗れ走しを皆寵愛と  
 憎し由と甲陽軍鑑に載むと以て知るころむころむ言つころむ説  
 ころむ甲陽軍鑑を著せし本意は彈正より筆取に猿樂彦十郎より者  
 あり彦十郎は甲州滅て後大久保忠隣の所より東照宮の御ことを  
 書加つて一書とありころむあり又或人の云ふ川中嶋合戦のころむを  
 前夜に論じ謙信強敵なるの故對々の人数にてさへ危きころむ  
 信玄八十謙信に一万三千より勝りころむ討死あきころむ有ころむ武  
 田の各存る理ありころむしころむと甲陽軍鑑に載む勝へ謙信  
 ころむの各存る分明ありと論じ人あり有き又同書に載む持氏生害  
 兩上杉より恣より武州河越より北條に負ころむ天の罰ありと



りて持氏と兩上杉と時替まり持氏の滅亡ハ永享十一年より氏康と  
ハ遙く百八年と隔るると同時に記せり北條早雲ハ延徳二年ハ相  
摸入打入り其頃上杉顯定ハ越後より顯定ハ越後信濃の境長  
森原より高梨より討むる早雲より兩上杉と如斯と氏康未生より  
より己前の事より甲陽軍鑑より記せしこと誤り天文六年丁酉  
七月十五日管領朝定と北條氏綱と武州川越より夜軍あり朝定  
討死あり此合戦を兩上杉と氏康夜軍とより記せしや同十五  
年丙午四月廿日持氏五代の後古河の晴氏と管領上杉憲政と共  
より川越より氏康と合戦有り晴氏憲政敗北より是を甲陽軍鑑より  
兩上杉と氏康軍とせりさるる五代己前の持氏より公方と記し五  
代己後の管領を兩上杉とあるより持氏四男成氏成氏の長兄公方

政氏より同人の長子高基高基の長男晴氏よりとより又甲陽軍鑑より  
載る高名の事ども虚妄多し中より就て再拜と手懸てあり敵  
と討取て首を得しこと記し事幾むとよりことを知り惣より  
甲州より敵せし士ハ再拜と手懸しと見ゆ誠より笑ふべき書の記し  
さるる其虚妄勝て計くると然れども其時より居て戦國ハ  
勢ひと能知り且士の情より達せし者の書る書る故弓箭取者の  
既より書より虚妄を以て棄づるべきあり

吾友の松崎惟時が語りける其師より宝山流の劍術の達人武  
藤十右衛門の論より戦いの巧拙ありおがゆ太閤秀吉ハ戦  
ひより拙きより小牧より十万人及ぶ兵を帥りて東照宮より對陣  
し誠より一及も合しと能りて東照宮の御弓箭世より勝まさ

せたまへる論や及ぶ然まごの箕形原より甲州の兵と御一戦  
有る衆寡敵しつゝ故りや利を失つをみひぬさる信玄へ海  
内無双ともいふべき謙信と軍たる度いふ打負らるる是を  
りくありし戦の巧拙は逃る其科有るやあられども天下に旗を揚  
世と治め國を平くするの道へ別り有て戦ひの巧拙はるる  
らむと語りしを是又奇論とまへ

常山紀談卷之七終

常山紀談卷之八目次

- 一 仙石權兵衛九州へ間者の事
- 一 島津家久島原合戦の事 附 惠藤某の事
- 一 立花道雪行状の事
- 一 道雪仁愛深き事
- 一 立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手へ加ふる事 附 道雪死去の事
- 一 稻葉一徹罪人と免さるる事
- 一 高橋紹運討死の事 附 立花統増薩摩へ囚ふる事
- 一 紹運齋藤鎮實の妹と娶らるる事
- 一 志賀親次山海へ嶺へ兵と伏る事
- 一 高畑三河功名の事

- 一 森迫親正討死辞世の事
- 一 薩摩勢根白の砦と攻る事
- 一 巖石城合戦坂小坂先登の事
- 一 野矢甚右衛門功名の事
- 一 秋月種長降参の事
- 一 新納武藏守豪氣の事

常山紀談卷之八

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○ 秀吉島津と討んとあり人事年久し天正十三年仙石權兵衛と商人の体し九州之間者し山々浦々の地理悉く繪し書て起臥し見兵と分ち攻入べき道々と計られたり

○ 島津中務大輔家久肥前し攻入島原の城と攻落しる所し龍造寺隆信大軍しを押寄しり家久らうし三千計ありしと幾重と多く取困む家久是と物ともせ明日の合戦吾先陣まぐし貝と相圖小切懸るべしと定て夜の明ると待つ朝霧深く物の色も分る家久将机し侍てくれ間と待や朝日出て晴しし子又七郎豊久十五歳しなりと近付天晴武者振し只上帯の結びかくま

るりのぞとて結び直し脇指と抽て其端と切て後よく聞け若軍  
小打勝て打死せば此上帯我解べし軍の屍と戦場はく  
さんし島津の家小生きたる者の思ひ切つりと敵もあり我も黄  
泉に悦んぬるといひもあつて貝吹立させ真先し隆信の旗本へ切て  
わする島津家此弓箭へ先駈の兵へ矢一筋持せ射放ちて弓と捨長き  
刀と抽て切てわするも又あつし隆信の旗本乱れ立敗北  
すれは隆信きこるし返せと下知し遂に踏止り討死せしれり家  
久勝てりし人数とせし陣と整へる所し龍造寺の臣惠藤それ  
がし首一ツ血し染るる刀し持添大将ハ何國にあつし候ぞ功名  
の印比候と言て家久し近付寄り首と投捨て馬の上から家久と  
下太刀斬りし家久心疾く馬より飛下りしれは左の草摺と

切て餘る刀膝しあつしりり惠藤と中し取らして討ひしき家久  
あつし者と討ち下知ししれは生捕んとすも素よりあつし  
最後と思ひ定め切て廻りしわづし終に討まはり惠藤とのつて  
名をバ名乗む家久惠藤が首と膝の上し置並びるも剛の者義勇の  
士とハ是とこそ言べしれ生捕て對面し龍造寺し送返さんと思ひ  
しし思ひ切し戦死せしれハ力及ぶとて近所の僧と請し惠藤  
か吊ひの事念ふし沙汰し其有様詳し記し其僧頼り故郷しやら  
まきし諸豊久と呼て今朝の約のどく上帯と解しりしや家久  
ハ島津家の士大将なり豊久後又中務と称しり関ヶ原し於て  
義弘の身し代り討死有し此人なり  
立花道雪ハ

立花道雪ハ

始戸次とく立花の跡と嗣一故立花と稱す始の名ハ鑑連男子な  
く高橋紹運の子と養ひて嗣とん

若くし時雷一震足疾歩行心一任せ常一手輿一乗り累代  
大友家一属を大友家衰へたれども道雪心と変ぜば武勇とくしき  
人こそ士卒と見る事子と愛するが如し戦ひし時ハ二尺七寸有々  
る刀と撞ケ島の鉄砲と手輿一入三尺計の棒一腕貫とて手  
提げ乗き長き刀挿る若き士百餘人手輿の左右一引具一軍始  
れハ手輿と此士一かけ棒と取て手輿とくきこいといと聲とあげ  
此輿と敵の真中一かき入ると拍子取遅き時ハ輿の前後とたぐ  
きぐる敵一北よりより取とて面も少くかき入られハ手輿の左右  
比士三尺餘りの刀と抽連て一文字一切てかりぐる先陣の者

いもきりや例の音頭とといひもあつた我先と競いかりのくわ  
堅陣とも切崩さぬといふ事か一若先陣追立ちし時へ道雪大音  
上て我を敵の中へ昇入ふ命惜く其のち逃とて眼と見出し下知  
せられし守り返して勝る事あり斯き道雪の士ハ一日一  
幾度槍と合せるといふ者多し又道雪常一士小よる者ハなき  
ものなり若くし者あつた其人の悪きものゆゑ其大將の勵まら  
比罪多し吾士ハつゝや及ぶ下部一至ても度々功名なきはあつた他  
の家こそ後まゝる士あつた吾方一來り仕へて取かへて逸物一せん  
吾士の四月朔日左三兵衛ハ若死時初て後まゝ一事の有一しつもの  
頃より血臭き事一ゆひて次第一物小慣き今ハ五六人比剛の者  
とせしつものぞかゝるといふし武功なき士のあきハ明塞きの

有ハ武功の事、弱ク、ござらん我見定り、明日も軍、出ん、人  
にをる、これ必、拔懸、て討死、一、つ、夫ハ不忠、人身、と全、  
て道雪、と見、つ、給、各、と打、連、れ、斯、年、老、る、身、の、敵、に、真、  
中、一、あ、り、て、ひ、み、る、色、と見、せ、る、と、怨、睦、一、い、り、て、酒、酌、か  
ち、其、比、を、や、り、る、武、具、取、出、一、と、勇、と、聊、も、武、者、が、の、能、見、ゆ  
重、て、軍、の、あ、ん、時、必、入、一、後、ま、と、勇、と、聊、も、武、者、が、の、能、見、ゆ  
れ、呼、出、一、と、あ、ま、人、々、見、候、へ、此、道、雪、が、見、一、所、一、違、ふ、と、あ、  
ま、を、勝、る、剛、の、者、此、名、と、呼、て、頼、候、は、一、能、引、廻、一、と、  
い、又、人、々、の、心、と、合、せ、一、事、此、道、雪、ハ、天、の、真、加、一、叶、ひ、る、事、  
と、勇、め、立、若、ろ、れ、士、比、席、上、一、と、心、得、違、一、事、の、あ、る、時、を、客  
の、前、と、一、呼、出、一、打、笑、ひ、道、雪、が、士、の、あ、ま、と、あ、ま、と、

も軍、臨、て、火、花、を、散、一、候、槍、ハ、此、人、々、を、能、れ、と、槍、取、一、  
ま、め、一、と、興、一、れ、一、人、々、感、ト、涙、と、流、一、此、人、の、為、一、命、を、捨、ん、と  
ま、ま、一、け、り

道雪の側、仕、る、女、一、心、を、か、一、者、あ、り、と、あ、る、体、一、と、有、り、る  
是、と、あ、る、も、の、有、て、あ、る、夜、物、語、の、時、申、ら、る、東、國、の、大、將、一、誰、一、と、あ、  
る、候、寵、愛、の、女、一、密、一、情、を、通、一、者、の、候、ひ、一、を、誅、せ、一、と、あ、  
る、事、と、態、と、い、ひ、て、道、雪、の、答、を、試、一、け、り、道、雪、打、笑、ひ、若、ま、り、の、色、  
一、迷、い、一、と、必、一、も、誅、せ、一、と、有、る、人、の、上、一、居、て、君、と、仰、が、ま、ん、一、ハ  
一、初、の、事、一、人、を、殺、せ、一、人、背、一、り、一、國、の、大、法、を、犯、一、と、あ、  
る、異、ろ、う、と、を、語、ら、ま、り、る、彼、者、傳、へ、聞、て、心、一、慙、一、又、道、雪、の、仁、愛、一、感、き  
其、後、薩、摩、の、軍、鎧、一、嶽、の、城、を、攻、る、時、道、雪、城、を、出、て、戦、ひ、一、大、軍

押懸り危く、小彼者大音上乱り、味方と取、めを散々、戦ひ  
る其ひり、道雪城ちり、引取り、小敵猶まび、進て来て、城門  
と、あへぬ計あり、くまひかの者又取て返、武士の討死ま、死所ハ  
爰、所り各是、討死せば城とバ敵、小奪、返せや人々、  
槍と横、折敷ければ返合する者三人あり、面も、戦  
ひて討死、城門と閉、

天正十二年大友宗麟、猫尾の城と圍て、数十日攻、落む大友の  
兵長陣、氣疲、立花道雪、高橋紹運、聞て宗麟、馳加、然  
る、相謀り、俄、兵と出、二夜、腰、兵糧と付、陣觸、  
八月十八日、打立、士卒、是、何方へ向、怪、下知、  
後、三笠郡、内山、江原へ打上る、是、黒木、の猫尾へ押行、

下知、紹運先陣、今宵、ハ、夜半、過、月傾、筑後川の  
邊、夜ハ明、然らバ敵、中、数十里、押通、事、あ、紹運  
の役士、言、れバ道雪へ、去、送、道雪色、あ、早、  
夜の明、見、晴、敵出、撫切、通、乗物、叩  
き、使者、行、萩尾、大學、使、恥辱、  
逢、馳、歸、紹運の役卒、此、謀、筑後川へ、押、  
夜明、渡、る處、ハ、瀨、瀨、踏、不及、涙、打、入、押  
渡、る、秋月、種實、比、士、芥川、兵庫、と、ソ、者、五十騎、計、星野、城、  
番代、歸、る、方、誰、の軍、と、押、候、ヤ、と、問  
紹運、餘、下知、取、卷、て、一人、も、不、残、討、取、首、と、小、高、き、所、  
並、軍、陣、の、血、祭、夫、石垣、原、へ、押、出、後、陣、と、待

捕へ耳納山と越んとす處小秋月種實筑紫廣門の兵共所々  
 方々より兵と出—爰のほかりか—この切所—待うけ鑊砲と  
 打かふる事数とあはれ中—も大木と小楯—て其陰より顔  
 ぶり出—て鑊砲と打者あり殊—手ぶれ—て手負数多—及  
 ぶ—道雪の乗物昇—る人—も中—て倒れ—うば乗物と—  
 と落—ぬ道雪怒てあはれ—と下知—て傍—より頻—鑊砲と  
 打—うけ—るも面計—の—を以て鑊砲と打出—るべき  
 透間—か—て中々あ—るべり—ぬ道雪—の—士—手—ぶれ  
 ハお—ぬる巧—く—せ—と詞—とかくれば紹運市川平兵衛と  
 ソ—士—命—せ—れ—る平兵衛承—候—と—て鑊砲と構—待所—  
 又—れ木陰—より面—と—出—るれば市川手—早—う—り—

小眉間—中—で轉—び出—てう—つ—ぢ—小倒—れ死—む敵前後—より取狭—く  
 き—後陣—の由井雪加—より道雪へ使—て以て唯今討死と遂—べ—と申  
 送—ると聞て紹運大返——返—る味方—の後陣危—く此切所—と越  
 が—か—る—と取—て返—敵と拂—て耳納山の嶺—押—上—り  
 ——とや夕日—及—諸卒—を—と押—来—る—疲—と休  
 め—今宵—ハ爰小陣—を—曠原—折敷—せ—り俄—雨降—  
 来—き—も兩將打廻—りて士卒—詞—とかけ—る—本—より兩  
 將—の恩惠—な—る—者—もあ—れ—る—疲—と覺—え  
 り——と斯—て一夜—ハ—陣—明—の夜黒木—小押—付—られ—る  
 豊—後の兵競—ひ—る宗麟—も兩將—乃—舉—動鬼神—の—と  
 宗—敬—諸卒—及—ぶ—を—て—せ—れ—る—宗麟—



ハ人々思ひ放きたりし故田原親家も俄に心替りして兵を引具  
して豊後に歸りたればありひくし事ゆくは宗麟も引返されし  
うハ兩将も高良山に陣して其年も暮ぬ明る天正十三年の夏  
し及びられ陣がくまへしし紹運ハ赤司小屯をか道雪ハ北野村  
天神の壇小移らしし病付て次第に重くなりし五死し  
し屍し甲冑と著せ高良山の好巳岳し柳川の方へ向て  
埋むべし此事背きたる我魂魄必崇とるべしと遺言し  
九月十一日七十二歳に終らむなり斯て此に十時摂津守  
と使しして立花の城にやを統虎にかくと申す骸と只一人棄  
置んこと人比誹り免せりし立花へ歸り入るべき旨答へらる十時  
陣所へ歸り此由としし由井雪加され仰の趣ハ不可あらざる非

まどと遺言の重られば背きたるし雪加先爰して腹と切御供も參  
るべしとしければ由井大炊某も腹と切右脇の御供も我立べしと  
しハ誰も争う残るべしと殉死せき人餘多小及へし其時原尻宮  
内少輔熱々と闘て各達唯名聞を好するんしハ然るべされども統  
虎公の御為ししあがりせんや夫程に存るをいへ嗣君も御腹を  
せきしんころそよららと荒らるにひきつる雪加聞て尤も候然る上  
ハ我思ひ止るがし指立花へ歸り參らむ候せん事然るが  
し祟のあらしハ雪加一族罰を蒙るべしとて九月廿四日陣拂  
て道雪の稚の供して立花へ引取らる  
楠葉伊豫守一徹下人罪有て死罪し行ふ時聲を上げて泣く命と  
まやと云へば彼罪人ソやく命と泣く泣くあはれ命のうら下

太刀恨むべき事斯成果る事の口惜く泣き入りとツクを入々悪き奴  
哉とて斬棄すとひりめくと伊豫守聞てそれ助とて縄を解せ  
つかぬも一太刀打よとて追放ちたれば忝まき一再三つひ  
く立去り其後年経て一徹病重くなり一時彼下人来て力を  
盡せし本意を遂おやと泣く頓て一徹死て葬の後彼下人  
一徹の墓小詣て吾々をなぐりて君と一太刀恨し申せしと  
申せしが故より君隠まきをせりいよ生て居たりむハ刑死よ及て  
泣くハ命惜き泣くは人の申さん事恥し候とて腹搔  
切く死にたり是を以て見る不戦國の時上の人下此人其情の太平  
無為化し浴しある時の人異ると思ひたるべきを  
島津義久島津圖書忠長伊集院右衛門太夫忠棟と大将と

兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運と政岩屋ハ要害の地より  
らむ宝満が嶽に楯籠て防くはし者有紹運爰と去て宝満が  
嶽ふ入られれば勝るはあを敵と恐る逃せりと誹らるん  
も口惜し此城と墓小定めしりちりも動くは四方と圍て嚴  
攻よりられども驚く色も有り義久の士大将新納武藏守  
忠元矢留と乞て城中に申へき事候と呼りたれば紹運聞て何  
事より候と問ひ新納申るは紹運の武勇世よ名高しとよども大  
友家小組せしむ亡衰へし事近きあり大友家ハ切支母と  
崇め無道して復家の興るべき候は古き詞ハ一張一弛と申事  
の候疾義久と和平せし候へとひたれば紹運聞て斯申ハ高橋家よ  
て麻布外記と申者よ候只今兼り候旨紹運し申程の事よ

候に聊義の當る所と申べし人々能聞ま候へ九盛衰消長ハ  
時の運少く古の細川畠山赤松山名と始とて今川武田近國  
よて尼子大内等一度ハ盛とて一度ハ衰へ候に紹運  
今の限り成くも胃と脱て降参せうと存まや大友此家え  
右大将頼朝卿の時より子孫國と受傳へぬまど日向の軍取  
より貳心あもの多く出来て今かく哀へせりけまども今ふも秀  
吉公大軍よ九州小渡らせり薩摩攻入らんとん盛兒島の破  
き人事も遠うと勢ひ盡運衰へぬと見て志と換るハ弓箭取身の  
耻辱して人ハ爪弾せりべし松壽千年終り朽る事ぞう人生ハ  
朝露の日影と待た如く只永く世に残りぬのハ義名ありと覺え  
候程に降参ハ仕らとと高聲に呼りけれハ新納も又ハ事な

うり外記とい名乗られども紹運をせめて詞をうひしん人ヤ  
あつと言ひくかくと猶降参とすりて莊嚴寺の僧と使ひしきど  
も聞入るまは攻りて天正十四年七月廿七日四方より押寄関  
比聲と作てあけまはく聲と出して攻りて城中ハ思ひ設け  
らる事なれば爰と限りお防ぎられども終り打破らるまは三原紹  
心

うり太刀のかわりひきまは久くは天津空にも聞えあはるま  
と一首の歌と塀の柱に書残して討死ま弓削平内ハ強弓の手きり  
矢倉にありき詰引つめ箭種と惜すに射伏るる左の手  
痛手と負敵の中みかへ入て討まきり高橋越前守伊部九藏も  
聞ゆる弓の手なまめて物具のさハやう敵と目よあけてあま

射倒一矢種盡もきき太刀は切先と揃へて討て出散々も戦ひ  
 一足も引ぎ討死しつゝ尾山中務ケ子太郎次郎十六歳も父  
 と一所に死んとして出ると母袖と扣へつゝ振切て敵の中へ入り  
 入討死しつゝ其片袖母の手も残りたり寄手も討死し屍も  
 四方の谷と埋ゑぬ既し城兵残り少くなつゝ何し猶豫も  
 死して討て出とめき叫んで戦ひつゝ最期の軍も入お笑つて  
 或へ腹と切或へ敵と引組で刺違へ枕と並ぶて討死し紹  
 運ハ江洲右衛門大夫三浦式部黒岩隼人子女童ども皆刺殺し  
 て敵の手も懸ると下知し薙刀打振薙で廻られし今ハ是を  
 和歌と門の扉におまゐらせたり  
 かをぬと岩屋の苔も埋ゑて雲みの空一名とてくむは

一説をうとつての末に世遠く埋まぬ名をヤソい名の苔に下水  
 かく行年三十九歳して自害して失られつゝ士卒もあつた  
 深く義厚かりしを救ふる城を守りて千八百人の士卒一人も  
 逃散者のなつゝ一例少き事あり紹運始を鎮種と申す  
 一説し城中の婦人ハ悉く困りし先づ宝満ヶ嶽へ入れ  
 故害小あつて又紹運薩摩の軍と見渡しつゝ馬煙黒  
 く押来る紹運人々に向ひ今押来る敵六十已下廿歳已上の者  
 どもあるべし今軍も打勝て吾者どもこそよく討死しとも彼  
 敵兵も又三四十年と過ぎし野原の白骨とらるゝ人生ハ  
 朝露の日影と待たせし義名と萬世に残しん事武士の本  
 意なりといわれしは城兵勇氣十倍せし勢いと透され一陣

一成て薩兵と切崩し一人も残らぬ討死もつり又寄手の大将  
 と島津家久たりともつり紹運の物具は引合し一封の書あり島津  
 中務殿と書しき家久是と讀し今度降参を勸らるるの諫は  
 是義の故より別し一封の書成大友に送り届けり候へど  
 ろう中務類は稀る勇將を殺しるよ此人と友とせはつらう  
 嬉しうんし惜死事より弓箭取身やと恨めしきものハな  
 僧と供養し葬禮と執行ひ壇を築きて家久香と焼再拜し  
 りれば義と感ずる國風も薩摩武者皆焼香し涙と流し紹  
 運と称美しるもつり又一説し天正十四年六月島津圖書頭  
 伊集院右衛門大夫兩先陣より筑後國高良山に押入島津義久  
 同兵庫頭義弘ハ肥後八代に旗本と陣し所々と焼働を筑紫廣

門の方へ兼て解す有しハ俄に騒ぎ立防戦の備はなき様もな  
 し七月七日薩州の軍筑後川と涉り其明の日廣門の館を取囲  
 門と虜より同月十三日先陣の兩將太宰府親世音寺に善陣を其  
 外龍造寺政家秋月種實と始し相加し十萬餘に及びり岩屋  
 の麓筑山横岳二日市太宰府のありり尺寸も透間なく陣し兩  
 將より莊嚴寺の僧を使し此度太宰府に攻め候ハ紹  
 運に對し弓箭取べきは候筑紫廣門に心あるふり是と  
 討べき為め既に廣門を生捕ぬ宝満が嶽に紹運は實子茂  
 置き候て堅く守らせし候事謂き多きふ似しと云く宝  
 満と渡され候べしと云送りたる紹運義に候ひぬ素より一言の  
 仰りて押て大軍を以て某が守り候城下と馬蹄蹴散され

候事弓箭の礼に非ずと申べし。緒統虎も道雪の家を續て立地と称す。紹運も今一  
在て八関白秀吉に属す候へ。宝満も岩屋も関白の城にて候  
と渡り参らざる事存りし。候との答に使僧歸り言ひければと  
も弱く城と渡すべき紹運はあらず。八関白に圍むべし。諸手口々の  
攻手と定め七月十四日より柵をとり矢合を始めし。城の中堅  
く守りてひるめる体なり。未申の方尾山中務が持口より銃砲弩弓  
をもて城へ攻寄りし。寄手より打懸數百人打殺し手負ハ數をた  
或時嶺の手比寄手より矢留と乞て新納藏人と申者も候。紹運  
公に申べし。此事候とついで紹運麻布外記と名乗て詞戦ひし。及べ  
り藏人詞を盡し利害を説大友殿に。切支丹の宗門を尊信有て  
神明佛法を蔑し。天道に背き。故人心散り。成滅に近き。

候はく島津に属せしれ候や。し中給らんや。し紹運節義と  
説て屈服の色あり。来春を関白九州へ兵と出さる候はく島津家の  
存亡も計るべく。主の威ある時ハ忠を致し衰へる時も操を替はる  
以て弓箭取身の道に各達島津家滅亡の時臨て躬と隠謀と  
廻らされ候へ。只今おびし。目餘る十萬の士卒も百年に齡  
保つべし。斯る心も候ひる。ハ士の義ある道とを存せしむべし。答  
へて降るべき事ハ思ふ。し兩將重ねて莊嚴寺の僧に使し。ハ  
國に大軍を引受堅固に城を守らる事廿日。及べり。紹運公の武勇  
九州に無双とる。宝満立花岩屋とも子細候と。和談を取結び  
軍と返り圍と巻はく。し申る。然きども十萬の軍兵ハ覺し  
候間人質と一人賜らんや。し此後大友島津和談ハ紹運公

の心あるべし事ありしん其時入質と返し九州一統島津に属  
しん其後中國に押渡り島津家天下に旗と立候べしと云送  
しん紹運許容せし人質と関白の大友家に出さん事あり  
かん秋月種實龍造寺組一夫より一同九州の乱に及べり根本の  
人ありしバ秋月小腹切せ薩州の兩將より今度の弓箭京都又豊州  
への遺恨ありし筑紫廣門を反心と糾明せんためなりと神文と書  
て賜ふ候ひるが紹運事よく計り候べし然らば此城を以て墓  
所と爲し答へらるる平和も事遂に遂に七月廿七日諸軍  
一同小押寄て卯の刻より軍始りて午の刻に終りて寄手大軍  
入替々々攻め入りて手負討死せむらむ去ども死骸と踏越  
息を継ぎに攻め入りて限りと思ひ切らる城兵各持口と一足も

引に切死しありりされバ城陥りぬ紹運の左右に八名と得る剛の者  
共五十人計り討たされし後度の勝負を思ひ今と最期  
の軍をれに當ると幸ひ一向敵一切先と揃へて討て懸り一陣二  
陣と迷の谷底へまくり落しされバ半時計に攻入得たり紹運  
手負討死の士卒と見えたり死する者一ハ無二の忠節謝り小詞  
を一と一礼一息の通へる者一ハ自ら氣付の薬を口に入らるか  
る際一及で軍兵一愛と盡されり有様數年城と守り度々の軍  
功と顕し今度ハ萬一も運と関へべきあり大敵の困に逢し  
卒一人も落散ざりし類なき事といひあり其後紹運難刀と提思  
み程戦ひく辞世の和歌と扉に書付三十九歳に腹と切し  
く寄手攻入て敵をす斯る大將も又有べきや士卒一人も降参せ

逃散事ありりと惜すぬ人ぞなきと云々内室と始め刺殺す服を  
くてもろくそとるりたれども深く寄手しつるり養育しおろせよと  
統増此時宝満が嶽あり薩摩の兩將使と以て城と渡されよと  
云送る統増今年十五歳なり城中以ての外軍兵少く防ぎ戦ふ  
べき事思ひもろく秀吉の出師と待受べき間志ろく生延て時と  
窺ふよ志ろく相謀り統増と立花と送り届け給はりるんよ和  
平まべし然らば城代枕一切死すべきと答へるんよ兩將より子  
細ありし許諾し神文と書く送りし俄に約と変トおはる  
て立花と送り返さる其後肥後の吉松とよ所に移し番兵と  
付置より紹運の内室ハ筑後の北に閑とよ所に移し置諸立花へ  
使と以て降参せしまんやと言送る統虎實父と候紹運ハ閑白の為と

自害と遂候ひき我又紹運の為よ自害と遂べしとく軍兵と寄ら  
まよ此城の切岸より箭一ッ仕らんと答へらるる處よ八代よ  
陣せしれし義久より兩將下知し秀吉師と出しく打向る由  
言ふりせり疾兵と返さへしとありるんよ八月廿四日兩將太宰府  
と引拂ひぬ統虎陣と押出し高取の城と攻落し城主星野中務  
大輔兄弟と始悉く討取るまより岩屋よ向る所よ立花の内小野  
理右衛門とよ者忍入て火を懸たりしあをるる支もあ  
く逃落り秀吉感状と賜はり大に称する統虎又密に竜造  
寺よ北の閑に押込らきし母と奪取給るんやと頼まし竜造  
寺も薩州と弓箭と取べき志ありし心を得候と堀江覺仙とい  
へる者よ軍兵餘多指添て北の閑に押寄薩州の番仕者と追ち



り紹運後室と奪取頓て立花へ送る届けざり後室此頃ハ  
法名と宗雲といひしをかくて薩州ハ統増と八代へ移し高  
津加の法華寺に置いて警固の兵に嚴しく守らせざれば附添  
者共さきく謀を廻らせども本國とハ遠はるぬ謀もまき  
術をく日を送るる尚心りとあや有らん薩州に移し下  
堂院と云所置り秀吉九州へ渡海し先陣薩州川内にて進  
まれしは統虎使を以て統増と波しりんやと義久の陣へ送  
られしは義久子細し及つずし返し參らまへまきり答し及  
し六十時摂津守と迎し下堂院に遣し付添しる面々も残る  
引取川内へ行道海邊と過る小秀吉の軍兵船と掛並へ居る  
か落入と見てあまらるるとして小船のりひくくと陸に上り取囲

んとし十時勝て賢き者して邊りし有る小船をかり本船に漕よせ  
統増なる事と断られれば大将と覺しき者船屋形に上り再拜と取  
諸卒し下知し静めりし虎口と遁きて川内し著兄統虎の陣に  
入て對面せられし此統虎ハ後し左近將監宗茂とて驍勇無双の  
大将をり過し天正十年十月六日秋月と道雪紹運守竜野  
にて軍有し時紹運自薙刀とらり烈しく戦ひし統虎十六  
歳にて初陣たりし其器量と見て道雪養子にして家と嗣と  
き事と紹運に乞て吾子とせられしと  
紹運若き時弥七郎といひし以兄の鑑理齋藤鎮實の妹と弥七郎  
の妻せしりし約束せられし其初豊前中國と軍有て殊に騷  
し迎へ取むと打過ぬ其後弥七郎鎮實と對面の折し

兄が申かきせし如く迎取ぶぎし軍の最中少く斯ハ遅り候頓て  
 迎へ申さんと語りし鎮實が少く申かきせしハ可忘も候も  
 ど其後妹ハ痘瘡と煩ひて以ての外見がく成ぬ中々かき有  
 様し見届らるべきあり今おそハ参らせん事叶ひがしとい  
 ひし時弥七郎色とく夫の存も寄る仰と兼りゆるあり齋藤家  
 ハ先祖大友家より武勇きくし引取ておそしれハ兄と  
 候りの迎へ申さんと約束する事候夫と辞退も候す我ハ少  
 り色と好む心候をばと頼く誓礼あり其腹小二人の男子出来  
 たり此迎へし頃紹運二十歳及びしりしや

○ 島津義久大友と攻所々乱入志賀太郎親次獨義久降らば  
 義久松の尾城に在て秀吉大軍より九州に渡らると聞て薩州小

引退く親次大に悦び嶮岨の地兵と伏く打破るしとて鉄砲の  
 手利せ人擇し出し山海の嶺の林小待せたり然る處首藤五郎  
 大夫堀八郎といふ者此度の撰し残るると口惜き事しおし密に  
 道に隠て薩摩武者二騎打落しとる者伏兵有るといふ程とて  
 あれ大軍林小入草と分てまがしとる者二十人の者ども力多し藥  
 と惜し散々し打うけ追くる者共打殺し引退く親次大息つ  
 まで義久とハ山海の嶺ハ越ましとる者天の祐に逢き義久を  
 言りきり

○ 豊後國合志常陸介と大友義鎮攻る時佐伯紀伊守一説し彈正少將惟教  
 大将より佐伯が士大将高畑三河一日十三度の功名あり其後  
 人問て僅し槍刀一兩度迫合ても大に疲き息切て小兒より買は

一日十三度の功名はたゞ志ハ飽すぐ剛なりとも力ハ息も續まぬ  
 らくをいふうー々々々々高畑聞て打笑ひ別の子細も存事あり我  
 戰場に打臨て勿論の事とハいひあぐ死生存亡の間は於て少一の  
 思案を費すべき事なり一は故一人ハ騒がしめても我ハ静なり大  
 くハ槍と合せ太刀と打ちあぐさる己前ハ力を出し一氣を張りしん  
 是ハ依り精神草臥疲せりるらん我敵ハ逢ふ時我首と敵ハこ  
 らすらん敵の首と我取ら此二の中天命ハありとありひき初ハ緩き  
 一似しとせしむも打合ふ時一決して一槍の中ハ勝負ふる故ハ疲る  
 事なく候なり不入處一々氣を苦しめがらゆ名幾度事ハ逢ても  
 胸中安閑なりと答へたるとせ

同ト城攻ハ佐伯ハ属ハ森迫一本閉三十郎親正首と取又戦ひく

討死する時十七歳なり常陸介ハ後兵山本十郎とよみ者其首とる  
 小鍬形三本菅蒲の冑なり短冊と付し

命より名こそをー々々々武士の道ハかかへきみちりるればハ  
 常陸介感トて其首死屍と高畑ハ許し送り返りたり親正ハ豊後  
 大野郡三重郷の人なり

天正十五年二月秀吉島津と討る時大和納言秀長近江中納言  
 秀次ハ萬餘島津ハ豊後府内より薩摩へ引退く跡と追々乱入高  
 城財部の城と取圍ハ附城五十一ヶ所築きし中も耳川と越く根  
 白の若ハ官部善祥坊繼潤木下平大夫貞基龜井新十郎廣政塩屋  
 隱岐守光成福原右馬助直高一万餘人守りたり是ハ島津ハ後卷  
 と防ん為るなり頃ハ四月十七日の朝島津使と根白ハ高城の城と

渡るべし士卒と助けり候へと言送りければ宮部五十丁隔る秀次へ  
 此旨申て後兎角の返答を申さんとして使を返して後斯欺る急らせ  
 思ひもよぬ所へ寄ぶ謀り其用意せしむ人夫千人俄に山々の竹  
 木を伐せ陣の前深二間廣三間計の堀を掘り柵木を結ひく我も  
 くもと物具して待所は物聞小出り来る者ども走歸り敵押寄候と  
 言も果ぬ義弘一万六千餘の兵を率ゐ開て揚て攻寄り宮部木戸  
 口に進み出一番槍と名乗て相戦ふ田中九介其子彦六國友半右衛門三  
 村三郎右衛門と始め大剛の兵ども先を争ひて切て出相戦ふ義弘は義  
 久の子として素より聞ゆる勇將なり薙刀と提げ真先めけて只今此城  
 踏破き者共と呼り多勢堀を越胃の鏝を傾け蟻の如く柵の木に付て  
 引破んとする時兼て巧くはひく此網を断て柵と堀の中へ倒せしむ

薩摩武者討る者八百餘入り及べり義弘愈怒り進て屍を踏越  
 内の柵を攻寄透間あり戦ひるが内の柵を打破り十八日の朝三  
 丸を攻取り官部と始先愈死地に入りれば爰を限り防ぎ戦ふ斯  
 一うバ秀長三萬計して耳川に打向ひ根白の方茂見渡せば薩摩の  
 軍兵雲の如く取巻て鑊砲の音関の聲矢叫び相交り天地も動く計  
 かり川を渡らんと進すれらる小尾藤左衛門尉知宣秀長の馬は轡  
 と取て義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり関白吉りかあせ  
 のふべうと強て留るは既し川へ打入る馬を扣て進み得る藤  
 堂高虎ハ手勢を率ゐ川を渡り搦手より根白小かけ入自ら槍あつたり  
 敵数多突伏し宮部は力を合せたり黒田孝高同長政も手の者を引か  
 進み行道より村上彦右衛門と云剛の者を遣して唯今秀長六萬の

兵にて後卷せらる候と叫ばせり宮部と始め大勇悦べり長政の士栗山後藤川と涉り義弘の陣一切くかゝる秀長の士大将羽根田長門守も千計の兵を黒田父子に劣らんと槍と打入攻戦ふ小早川隆景も三千計にて耳川に來る秀長今敵陣にかりるべきと存まども人々同心せしむる如何まきと問るれども隆景冷笑て物とをにかり所井上伯耆就遠浦兵部宗勝古き背破の物具著く進み出島津八多の客人をり訪來る不出迎ひる弓箭の礼儀に違ふべし軍評定と申事や候と秀長を嘲りたり進むるにきりりり隆景馬に打入て川を渡り敵に後陣と取切んと進まれり是より薩摩の軍亂きて敗北しり義弘の役子三郎忠親踏止りて討死しり黒田小早川使と秀長に陣へ遣りて味方ハ八萬餘まり鉄砲三十計左

右の嶺と取切打立るるに義弘と打取入事堂の中より取り申されども知宜堅く留めて追さりりり義弘敗軍の士卒を集り所々火とかり引取り後まゝる士卒五十餘人戦ひ疲まゝと生捕て引來る助て歸さんりりり是見らまゝ生て又歸らんと紙を書て撃り結付て候を疾首と別ら候へて皆殺されり薩摩此人の勇氣とゆりり秀吉宮部ハ日本無双と云ふ感状と與へ尾藤ハ領國讃州と召放されりりり

○

秀吉島津と伐り時蒲生氏郷前田利長巖石の城に攻りりり氏郷の先陣蒲生源左衛門此頃坂小坂といひりり真先に進でかゝりていぢんと墨黒し書しり白き吹貫と門の真中し押立とめきはりんで相戦ふ兩の降如く鉄砲と打出せば吹貫ハ芭蕉の秋風と破しりりりり大

音上て一足も引か者共と下知一面も争はず攻入りたるを後陣より是を聞  
ゆる蒲生が内比士大将小坂といへる大剛の者よす口々よぞ譽せりける  
寺島美濃守此項ハ半左衛門といひらるが是ハ黒き吹貫お一立坂に續  
きより利長の士松原久兵衛と始りて先と争ひ攻入終に城を攻落  
して首四百餘打取り秀吉氏郷に感状を與へらる小坂小金錢十匹  
羽織を賜ふぬ

一説に小坂と一番と記せり秀吉坂を賞して刀を與へられけり小  
坂申るるハ一番の賞して候へ栗田其一人あり栗田ハ黒き吹貫して  
候ひき坂が吹貫白く目立申るるをべり譲りて是ハ秀吉愈  
大に感卜刀を栗田小與へらるるとも之り

野矢甚右衛門ハ敵五人討取首五提て氏郷の前へ来る氏郷とやす

くも首多く取りたるか如何してと問るる敵の太刀先左の腕に當る  
と存候時射出せ中らぬ矢ハ多し物なりとぞ申るる

秀吉島津と伐る時秋月種長小熊の城と出く秀吉の陣に至り降  
参りたるバ秀吉對面降参礼と受て後更に心おく事なり家傳ハ

りより捕柴の茶入とて名高き物有るを聞けあられ一目見るとや  
問き種長速に取来り候べりと云秀吉亦バ使を以て取寄ると

て秋月の従者と返してかの茶入と取来る秀吉見り聞り種長  
物なり家の寶物れども我に得させんやと懇にせられ種長

既し胃と腕で参候上ハ何條とむむにやうの候べきと申り秀吉殊  
悦むれ久く我陣所に在る軍兵ども怪し危ふやば疾歸す

我と防ハ弓箭取身れをひるり降参の上ハ吾恨に露も不殘領

地本のこころくるべしとつれし種長悦びて馳歸る種長が士卒  
若秀言種長と害せしむるは秀吉の陣より切死せんといひ  
定て居りし時歸りて委しく秀吉の詞茶入と乞ふ有様と語り  
くは言思ひし事とぬ事よといひあへりめくと聞傳へく九州の敵多く戦  
ぞして降参せり

○新納武藏守忠元、島津家の士大将あり勇名とゆき指と折る時第  
一ありしを大指武藏と称したり義久秀吉は降参の時新納へ肥後の  
堺泉の城より一説は天日守日本國の軍と引受一戦とせしめて降参せんハ  
弓箭の無礼なり疾陣と寄きをえ入一軍して討死仕らんといひ申送り  
たる秀吉頓て師と城下に進めらるるふかの城の路三四里が程ハ馬比  
鞍とありし鞍の紐と解をりの嶮難くを斬く打入りし武藏守暫

く支へく後一説は義久期と聞て大に驚き疾く降参せしと下知せしといひ今ハ是中をりし主君既に  
降参せし上八家臣の身として争てそれ心は背んや弓箭の礼儀とて  
かく申しるるを候へ日本の陣と城より引受る事士は一面目して候と  
て城と出よりり

一説は島津降参の後鹿兒島の外此城々ハ壞つべき由秀吉下知せ  
られし新納ハ城を籠て専ら防戦の手段とあり其身も病と称  
して引籠て居りし小秀吉聞ぬ体ふして歸京ありし其後  
島津上將ハ武藏守の供しきりし経経て秀吉何とて新納が  
城とば壞捨て合戦の設とありや怪しき事ありと聞きし武  
藏守人々の谷と待み進み出て仰出されし旨義久下知せしと  
も兼入ありて軍と志し居きりし踏過て通らせしひしことを恐

多く候へども帳一く存候へ其子細八城と関く事も古より其例な  
た事ありん只今日日本の主と世と称し申候関白様なる筑紫  
のてくさぐ引出一奉り鹿兒島小申請候事ハ島津が家の譽とや  
甲さん新納比城と破棄の悪奴め踏潰せとて軍兵と向らしん  
ハ必定なり其時一戦仕ら関白の御馬と向せしれ城多と未  
代丁をも申傳へんハ子孫の面目是過する事や候べき討て出  
火花と散一足も引を討死しきりとは是又武名とや申べき敵  
箭一筋も射けしめて城と破捨候事口惜く候ひき新納八日向口  
在く宮部善祥坊と始とて先陣の人々迫合たりハ島津降  
参の告来引返一候ひぬ島津が兵を以て日本國の大軍と引  
受合戦始終の勝利と計るべき候もいづも新納肥後口防ぎ

まらんハ地ハ峻き関白殿下より智謀をましくおろし候  
も輒く攻入らん事を思ひもろがる事あり嶺々谷々種々島  
の銃砲と打つけ思ひのま先陣と打るやうし申べは今不至て残  
念ある事どもなりと恐る所なく申るると秀吉聞く新納ハ聞  
及び勇將ありとて大言此答ハ更なるなり

常山紀談卷之八終



中山總論

卷之六

常山紀談

九千

東 京 圖 書 館

和書門

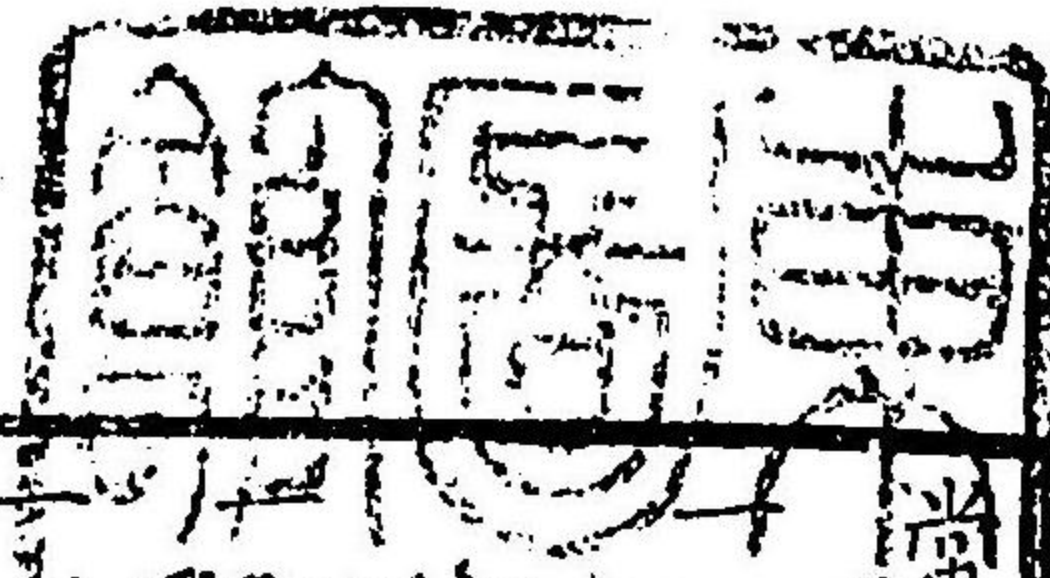
雜史類

三五函

二架

三號

一五冊



治山七談卷之九目次

井谷合戦の事元小川傳右衛門野村太郎兵衛城井友

北條征伐出陣の事附本多重次放言の事

鳥井源八郎先登士志を論むる事

南部越後攻口の事

上様日和とソノ事

伊奈熊藏兵糧を司る事

蒲生氏郷の陣夜討の事若氏郷金の三階菅笠比馬印と免さき

事

目次上

武藏國八王寺城落る事

大音藤藏兩森彦三郎功名の事

信雄卿那須は謫せしむ事

坂部岡江雪免る事

関白鶴ヶ岡参詣の事

関白宇都宮より佐野天徳寺と物語の事

浦生氏郷大志の事

奥州葛西大崎一揆の事

浦生家の士大將軍兵訓練の事

氏郷伊達家の刺客を免さる事

氏郷佐々木が鐙を細川忠興に贈らる事附黒塚の歌れ事

本多忠勝万善が舊臣を呼出さる事

東照宮武田北條の跡御制度の事

東照宮武田の舊臣を召て御物語の事

東照宮物具の御物語附小野木笠の事

秤御定の事附一步金辨當狭箱始る事

酒井金三郎本を忘る事

成瀬正成忠信の事

東照宮相摸塚御打廻るの事

豊臣関白五腰の刀に主を察せしむ事

竹俣兼光の刀に事

本庄正宗の刀に事

- 一 曹の名禄々ありし事
- 一 伊藤七藏高名の事
- 一 井伊直孝用意の事

常山紀談卷之九

備前國 湯浅新兵衛元楨輯録

○ 秀吉黒田勘解由孝高は豊前國を與へらるる一揆處々起る中  
 ちも城井谷友房ハ下野國守都宮弥三郎友綱が次男鎌倉の比よ  
 ち地を領しる子孫あり毛利壹岐守勝信は誘き地士とて佐一  
 民屋を放火も黒田父子ハ馬ヶ岳とよ城ありを城下よ押寄  
 る長政其時十六歳城井を討べきと勇まらん孝高同心せし  
 長政其比ハ吉兵衛といひく若士ども引具一切て出ま一揆ども  
 一支もせ敗北を追うる城井ハ山中の峻路よび入多  
 大石の陰に逃隠き大野小辨といふ若武者真先に進むると一揆  
 起合せ七八人取巻て馬より突落し後藤又兵衛小川傳右衛門

久野四兵衛馬の首を引返して敗北して久野も長政の馬廻りの真丸も成て一揆勝し衆押詰りも槍を合き一揆へ木蔭谷から五人十人うらや狩場の鹿を射るあく竹の鏃の矢して雨の降様は射るを長政馬より下で立討死まじ色ありしを近習の若共馬は掻衆せ退きくは一揆類は追うけたり長政の馬矢は中より爰して自害せんと言きしと菅六之介政利は馬を召ま候へしども聞入ぬ早上帯を解んとし久野を三宅三大夫若狭は走寄大将の自害の所より候はぐとて抱き馬は打のせ片手は馬を牽き片手は長政とて我等生残し殿を追討しや念もあく候地の利をきて引返して一揆の奴原追崩し申さんとて引退く菅は長政の鞆組違ふ手もくく小も離れ木屋兵右衛門は長政の槍を持て歩

立し續き一揆長政と見知り餘り三宅菅木屋を始として岡本弥兵衛小川久太夫坂本七左衛門已下五十人計九く成て思ひ切らる色を見て静し詰寄て二里計追うて其後へ慕らるけり後藤ハツとてく程々緋の羽織を脱捨し長政に歸らけり

後藤度々の武功ありて一万四千石與へ小隈の城ありて後り城井谷の軍物語よ及べ俄に病出し木屋兵右衛門は長政に向ひ後藤小川が有さま大臆病の男して候と親子共は取分て懇にせしめし候は兵右衛門ハ誠にあつたあめ体は候て敵追詰来りて一番は討死して御目よか候べし歎けり御眼力やあつたて退きたり其後長政筑前を賜り

小祿の士皆禄を増し、兵右衛門の六百石、鉄砲の者  
 二十人、司の賞美あり、人々木屋の殿を城井谷にて  
 罵つて、殿へ思召て斯くあつた、木屋我も左  
 思ひ、女憤あつた、首も切らぬ、いふは、是より  
 後も軍あつた、度毎に大言を吐ち、只今寵愛ある、奴原の  
 中、武者振の悪き者あつた、恥と與へ、我思出あつた、いひ、  
 聞者汝の下部のいひ、口は倒されぬ、と諫く、今の禄と  
 削らうとも、口は、とて笑ひ、  
 孝高の馬ヶ岳に矢倉の上、長政は敗軍を見て笑ひ居ら、  
 側より危く候疾加勢をせ、と口々にいひ、引  
 おつた、味方れ、真丸、静々と道を引退く、吉兵衛あつた、  
 危く、果して長政事故なく、引返ら、長政敗

軍を口惜し、引、夜の物打被て、臥居り、孝高物主を呼  
 べ、弱敵を、初めの勝を勝、のあり、勝、必敗の本  
 戒、塩屋善七郎と、侍長政の近習、仕へ、京  
 使、行、日の暮頃、帰て、長政の寝所、行、敗軍是非、  
 事、候、の者共、小辨と捨殺、殿も捨て、逃、兼候、殿  
 も、討死の所、候、何と、敵、後、見、父祖の高  
 名、取舟申、口惜、善七郎が御馬の傍、ある、槍と合  
 せ、一揆の奴原、追立て、引取、後、藤、振廻、候、  
 重て、一揆と軍、必死、思召、定、座、立、長政  
 も、警、思ひ切、俣、翌日、善七郎又申、口惜

へ思召され候ひし一揆押寄候り真先々々切崩し取を雪きま  
 へ善七郎ハ御馬の先々討死せん逃る奴原も励まらば軍も  
 程あは鬼神ありとも恐る不足と云慰むらば長政起上り物  
 語せしは長政ハ面目句として父の前より出で孝高叔ハ必死を期  
 してありと察し老功の者餘多長政ハ差添てゑり下知を禁  
 せしは一揆又上毛郡へ押寄りば長政火隈の海近き所山の上  
 へ待りて思ふ圍より受一同衆出馬のかけ場より縦横  
 衆割一揆敗北する處も追立てり鬼木塩田より者討き散々よ  
 成りて長政塩田内記を手づり討取向もかんとせしは老臣  
 ども馬より飛下り押へて陣を整へり塩屋善七郎ハ敵の中衆入  
 鬼木掃部ハ首を取右の方を見まは長政敵の首を取りて又

馬引寄打乗追討て首二つ取り痛手負て精神も乱まらば尚も若  
 殿の功名を問聞て嬉しや先日取辱を雪がせしめ此上ハおひ  
 置事ありと云り長政善七郎が枕元より居りて長政の手を  
 とり此後能心得とて殿は討死しとんと申者ハあき事候と之  
 ハ長政涙を流し汝を先づり事の残多きと咽ぐらば善七眼を  
 見開き先の比諫め申せしハ必死を思ひ定めり故候今度の高  
 名もとて今生の御目見只今を限りて一人ハ一代名ハ末代  
 申事の候しつひも終らば空しくありたるを比類あき者ありと云  
 けり翌日孝高火隈に来りて對面し若き者ハ懲るべくあてり思  
 慮の練ぬも終の勝を討き只勝べしとの思へば取を取たり  
 良將ハ時より緩みゆるも平ルれ軍ハせざる故に終の勝を全う



孝高制して要害を設け兵糧此道を塞ぎ馬ヶ岳より帰らば斯て一揆勢ひ盡くれば毛利輝元を頼み和平一々も友房の病ひを以て出以中津川より三宅三太夫城井谷より傳法寺兵部使者往來して互に物諾一々も或時三宅言々友房内室なりと聞勘解由は妹あり婚禮ありはソレ云傳法寺夫ハ悦ハ事あり能く人々も三宅三宅三宅年若くは老人と相計て三宅のひかり傳法寺ハ敵の妹を人質と取らんハ然るべしと思ひんるる三宅を頼るる三宅我主君の心をもてて容易にも申出らる哉事調むハ面目も候しどかどかして長政又斯と告て孝高も告遣一々密謀をあり三宅は孝高書と手へ縁を結ぶる未頼母も事あり例の兼忍おんも書きする三

宅傳法寺は謝りて潛り其書と取出して見せ吾も常は兼忍者と戒候が此度も又あるありとて傳法寺は既に聞届るるありと悦びて友房は告て是より心置あく中津川へ出づるを定りて三宅又迎ふる友房三百人計りて山中と打立たり三の丸は大手にて人を留次第に減らして本丸の書院にて對面あり吸物と出して酌ハ小川傳右衛門あり野村太郎兵衛者とて相圖は傳右衛門一の太刀太郎兵衛二の太刀と定りて長政盃とて時野村者を持て出づるが持する臺を友房は投付飛くや眉間を切る小川はれりて脇指を抽て切付まはるる運りて友房即討まらる供の者も所々手當して物具する者共槍をもちて殺しぬ城井谷へ軍兵を指回して打滅されり小川野村一二の定ありて違ひ

アハハ小川怒て其夜野村よりひくろ城井を吾初太刀とてきま  
先を越き面目と失へりいふと問野村打笑ひ左思ひの理あり能開  
き候へ年をいへば吾の弟あり汝功名の四度及び我の唯二度あり是  
をいふ劣るるのそあは先をさせて我後まは是こそ面目と失ふと  
いふる栗山又我兄の多兵衛とあは前後とあはるんこと似合たる  
べいかく劣るる我は争まんはねあが知一尺免され候へといひるは  
小川素より心易きとあり但一心安くも切きより尤とていふ親し  
くいふ人々野村が理り聞事あり小川もよ聴入るるを感しける

○  
秀吉北條と討る時諸將浮島が原に並居て秀吉をまら秀吉糸緋威  
の物具着て唐冠の曹黄金をもちづらる太刀佩て土俵に大なる羽壺  
に征矢一筋指仙石権兵衛が参らる朱の滋藤の弓持て七寸ありける

馬よ金の環路の馬甲かけ静に歩ませ打通りける東照宮信雄  
と共に出迎ひて馬を見て馬より下りていふ或心有と聞より一太  
刀参らんと太刀の柄と手とをみる東照宮左右の人よ向ひて軍  
始に太刀と手とをみる門出の目出候と高らふ仰めり候は  
秀吉何ともいふて又馬に打乗通らゆ

秀吉此出陣の時濱松の城に宿せらる本多作左衛門折節御使  
参りて帰るる旅装の休きて諸將の中より進出東照宮を  
け奉りていふ殿はいつうか愚はあはるるや國をわろ人の城は  
人よかきと候さる女房も人よかきと候るる罵るる東  
照宮彼の本多作左衛門と申剛の者も候が家久く驅けて只  
今のやうなことを申して候無礼の詞を申候と仰ありける人々

兼て借の兼て及びる本多殿と候ひ多よかる事申人多くある  
べしやと賞し給へし作左衛門物おき人ありて三奉行の中  
ぞれ政を執り甚仁愛の事おし獄訟を断る理正しく四民  
眠き服し東照官の神慮浅くぬ御事あり

○ 東照官小田原より向らせし時先陣の榊原康政と命ぜり井伊直  
政御旗本と定めし直政毎も先陣を好しし以時ハ少も辞  
退の氣色ありし小田原にて秀吉く人の人僅よ引具せしを  
見て唯今取圍とて計取べき時と候と進み申せし東照官聞し召  
入らせし先陣とていし

○ 山中の城を攻む時木村常陸介師春が士鳥井源八郎先づけり城  
よ付名衆より羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き来て汝ら首

取源八と世よりいし譽の士ありし田舎をり故武功を辨る  
むかふる場とていしあはれ氣後まほしき故爰に名衆まは是よ心  
付て我先し進む故思ふまゝ獨功名をあげば物の誅もあはれ名衆ま  
さ慶よく名衆ありと笑ひたり鳥井聞て平三郎の志の士と聞し真の  
士志をいしあはれ人の功をいし時ハ尚高聲よ名衆て人よ心を解  
かを添て多くの人を用ひ立せし武士の義あり獨高名をせん  
る小事ありいし足むと答へし平三郎の志ありし

○ 小田原を圍む時國清公の攻口の搦手山の上あり目の下は見おろし  
鐵砲を打入りし城中よりあが矢より鐵砲烈しく士卒進み兼る  
時南部越後銃口を空よ向て打せし其玉雨の降が如くありし  
城中ひし所を見濟し鐵砲を山よりあはれ透間を打せて攻破

○ 同時九鬼大陽守嘉隆日本丸と大船を乗廻り南の海上を取巻  
たり以所ある海にて東風吹時波浪山嶽を倒し如く如く船を  
静に波穏あり是よりして小田原海邊風あま日を上様日和とい  
あつたり

○ 同時東照宮伊奈熊藏を召て仰出さる事ども其時伊奈去年  
より兵糧の用意して沼津に運びし然るに此菅根山中に穀物の  
價江尻沼津と相同し遂に運漕せんより爰より求る事然るに心得  
く長東ハ武功勝まきあつたり謀ハ長く者あつたり

秀吉城主として電せしるに汝が職よ兵糧運漕の事よ心得  
と流して退出し

○ 同時蒲生氏郷金の三蓋笠並馬印ゆかり候て申され秀吉  
夫の聞中佐々成政が馬印をよまき免し今度小田原  
此武功よりして望む所はまき免し今度小田原  
よ人の目と驚く討死とわらひ定め繪像として日野  
の菩提寺に籠め打立まき斯て五月三日に夜に曇るる  
き城中北條十郎氏房が持口より夜討をさる氏郷も今夜に  
夜討入るべきに懈るあて下知せしは果して廣澤兵庫秀信  
大将して押寄り氏郷の物見の兵町野万右衛門より行逢ぬら取

直一指詰引詰射くも叶ひて引返せば敵進み来て柵の木を  
打破る蒲生源左衛門卿成田丸中務直政町野右近幸和切て出爰  
を専途と戦ひつゝ氏郷銀の鯨の尾れ曹の緒とつら

氏郷の許は新は仕ふる士は吾家にて銀の曹と着る兵度毎は真  
先は進み出て働くあり女男は劣らばあふふと云きつゝ氏  
郷彼曹著て毎も真先はけりつゝとぞ

兼て一丈餘の槍を設け置まゝを掲げ追立々々進まれつゝ廣澤  
兼て銃砲を後陣は並べ置る追来る寄手を打立つゝ廣澤ハ聞  
ゆる剛の者あり槍を横に片足を堀の中へ陥入る大音上一槍参ら  
んと呼りつゝ氏郷聞て飛くも突合つゝ蒲生左衛門卿可同五郎  
兵衛郷治佃又右衛門等々け来りつゝ攻戦ふ廣澤ハ今宵

○

夜討の大將廣澤兵庫一番槍と高らるる呼りつゝ氏郷目より  
て堀の中は飛へて撃つゝんと面もやぐ曹の鎧を傾け槍を取延  
くゝ立ちつゝ敵兵二人氏郷の槍をくゝんとつゝ七八度は及  
びくゝ氏郷廣澤も討つゝ寄手餘りつゝ戦ひつゝ廣  
澤めありつゝ思ひく城もくゝ引退く氏郷くゝ云ま  
す先は進んで追まゝも門を閉て銃砲をくゝ引返され  
くゝ曹は矢二筋折る物具は槍の疵透間あく十文字の槍さ  
の如くありつゝ秀吉感状よかの馬印免さるる  
武州八王寺城城主北條陸奥守氏昭ハ小田原はありて家臣留守志  
しつゝ前田利家上杉景勝攻んく先は降参りつゝ北條氏邦は  
使を城よりせ小田原既破れ城を渡し候へと言送る中

山近藤狩野寺従り氏昭降参証書を賜りて城と出べき旨下知  
まじら然らば降参参士の瑕瑾也氏邦が如る臆病者一人も城  
中候りんと答へくり利家景勝も其義を感むくも扱止べ  
まへ一万五千の兵をりて圍き入り甘糟清長攻入て火をり狩野一  
菴近藤出羽助實金子三郎右衛門家重死狂ひよ切て出討死す横  
地監物の氏昭の第一の長臣あゝ火りえ上せ今日を限り散々  
戦ひり守手討り者多し中山勘解由家範ハ武勇の將殊ハ八條  
修理滿朝が馭法を傳へ関東無双と世に称せり人あり大敵ハ必  
しもひるべ二百計して突て出爰を宸後と切て廻る寄手新  
手も入替攻り僅十五六人計ありり利家誰り中山ゆりある  
と問り松山の降人根岸主計定直が妻ハ中山が妻ハ兄弟あり小

岩井雅樂助ハ中山が馭法の弟子なりと申す利家疾く中山は味  
方ハ屬せよといふと二人と城中へ入らり中山既ハ自害して其  
妻も自害して其息もあつて詞をかりて馳帰す斯く  
へハ利家大に惜しかり監物の切めを逃さず北條家関東の城を  
とりて豆州莖山の城外ハ多く降参りるハ王寺の兵城を  
一戰死せしと東照宮聞り召其義を感し思召き中山が嫡子助  
六郎昭守二男左ハ信吉ハ祿賜り昭守ハ子信守六坂の軍功あり  
信吉ハ後水戸中納言ハ仕へて備前守と稱す狩野一菴ハ子主膳  
仕へ奉る

○八王寺の城攻り城兵切て出死狂ひる時利家の小姓大音藤藏一番  
首を取らる處ハ雨森彦三郎續て首取て利家の前よ至て實檢し備



○ 秀吉録倉比鶴ヶ岡一詰で八幡宮の戸を開き頼朝の像を見らるる  
 脊中と打つた被服より出て日本を掌に握る事式と御邊と二人を  
 然も頼義父子鎮守府將軍として東國の者ども久しく親  
 み多うと蛭が小島より兵を起さるる關東の靡き從つる謂れ  
 あらわぬ我の土民の中より斯日本を思ひの依よるは功尚高志  
 といふ

○ 秀吉陸奥に赴く時宇都宮より佐野天徳寺を呼  
 野州佐野辛澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱天正十三年討死  
 して子を一家庭連判の起請文を小田原に送り氏政の弟氏忠  
 として家を継宗綱の伯父天徳寺了伯の佐竹の一族の中にとて佐  
 野の家を嗣ぐともいふ是を用的に伯の夫より京都に赴き黒谷

○ 關居せしを秀吉北條をうけて時郷導とせしあり  
 物語をきき聞き武田上杉の弓箭盛あり一事を申さるる秀吉冷  
 笑ひしふ天徳寺謙信信玄といふ坊主も疾死するを幸あれ今よあが  
 ら居一人よ藤刀をかざげせ一人よ吾興の先ある朱傘と持せ  
 て馬の前よ召具まきよ此世よあはれ力あり何條車くも坐備  
 ふたはくくたうとせしあり

○ 秀吉陸奥に赴き蒲生氏郷よ八十万石の地を賜り一氏郷退出  
 一柱の倚りて涙くくく山崎の某居守て辱く思ひし事尤か  
 下又旗を揚めんよ邊鄙よ棄られし何事仕出さる志の空  
 しく成らるよよりてたがえは涙の流るよとて語らるる



○

天正十八年奥州葛西上崎一揆の時氏郷名生の城より會津に飛脚を以て鑛砲の玉薬を八人見とらるる計りて運び来ると下知せしめし山伏もあつた中よ玉薬を八人頭巾螺貝杖を携て湯殿山に詣りて送りて送りて是浦生左久か謀なり

浦生氏郷笠井大崎の軍又佐久間備前同内膳兄弟を先陣とせしめ下知せしめし事氏郷の心よ叶はぬ兄弟ハ元秀吉に属せしめし

秀吉より氏郷に賜ふ侍大将あり氏郷明日の軍ハ神田修理外池信濃岡野左内浦生源左衛門等先陣とせしめ佐久間兄弟ハ見物せしめし

と下知せしめし先陣の士大将六人相集り佐久間兄弟の軍立ちあはせしめしかく御養ふぬれしく討死ししるも巳ら躬を捨て只汚名を出さるるまでの事にてし御養ふぬれしくかひあけては御大将

○

の恥辱あり然らば進退の節内ありしにびば吐きし先陣の軍兵を打具し平野に押出しかけ引のありし五度よ及びくはしし尚調は

か六人きりて明日の軍ハ殊に大事ある故なりし馴しよ及びぬる人々ハ進退以外の調りもいふも能心得候へと再三詳し申聞せさせ

米配を取下知せしめし進退節よありしにびば吐きし明日の軍ハわたりし

俣かりしに悦びしに果し敵を切あひけ大勝をいふる浅野長政秀吉の命りて陸奥國より其軍ハ有様馳引の圖に當りし

終に見聞よ及ぶる所ありと褒らるるに氏郷も大方おぼ悦びて六人は感状を與へし物添て賞美ありたり

伊達政宗浦生氏郷の威に壓るるを心中よ深く憤りて氏郷を殺さるる事よ思案して數代家よ仕へし者の子よ清十郎とせし

六歳に成る者容貌勝まて艶きり〜密にわくわく事を語てきくを  
田丸中務少輔が児小性み出して奉公させり〜田丸ハ氏郷と姻家  
の親〜あつて来りし時使を伺ひて刺殺せし事あり清十郎が  
父の方へ遣りし書を関所にて改り見しより事起りて其謀の泄  
り〜清十郎を獄に押入此事を秀吉に告ると〜秀吉遠く  
慮りて強て伊達家と和平せさせり〜氏郷清十郎を呼出し吾  
過て罪あり義士と獄に入辱せし〜其君の爲に命を捨て忠と  
し〜賞せし〜餘りあり〜伊達家は帰る〜礼義正しく  
てありて帰されり

記し書し清十郎が姓を〜ぬを〜

○氏郷の許に佐々木が鑑と〜名高き番あり細川忠興いと懇よ吾

は賜りし〜豆理某是ハ世久〜傳はる物〜候似〜鑑  
と贈りし〜氏郷

〜歌の恥〜鑑とわ〜

蒲生ハ〜江州の士〜佐々木の臣〜氏郷伊勢の松坂十二万石  
あり〜後會津を賜りし時ハ四十歳の頃なり佐々木兼禎が子  
四郎太閤の時僅二百石與へ太閤の咄れ席に呼出さ〜伏見  
て太閤の前より退出し時氏郷昔の故に四郎が刀を以て従  
〜あり又安立郡は川あり向ふは黒塚あり安立ハ氏郷の領地  
〜黒塚ハ伊達政宗の領地なり〜争れあり〜氏郷平道盛  
の歌よ

みられしものありし原れ黒塚よむらひしりしつゝ

とらふ事ありしつゝ申されし事聞人黒塚ハ安立が原ハ属し

事分明ありしとて政宗争ひをやらせり

○本多中務大輔忠勝ハ上総の小滝十万石を賜りし小滝ニ赴き

土岐彈正少彌頼定入道慶岸の土とも呼出して禄與へり彈正

ハ同國万喜の城ニ居り故世しん万喜少彌と稱して武勇の譽あり

一人あり是を問ふ舊臣申ハ万喜常ニ房州の里見義高と弓箭

を取候が敵を急らせん為ニ舞臺と設け踊りて城門を明ら

とて果さば船着のけりしを平一候里見が將正木大膳時綱よを

来り船より上り時慶岸城よかざりし紙旗を縮の旗ニ立換へし

と古き門より不意に打て出忽切崩しり是より土岐が地よ

攻入事候りし詔ありし忠勝聞て土岐ハ甲越の両雄將も必

ぬ人ありし稱し其後舊臣ニ其家の事を問ふ時ハ必万喜殿とい

はる

○勝頼亡て後東照宮甲斐と治りし法度ハ信玄より用ひる處を改

易し事ありし年貢ハ少く納んと仰出されし百姓大ニ悦びあ

り小田原亡し後其地を治りしふも又同ト諸民大ニ悦び數百

年の恩義相結ぶる同ト

○同ト頃東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召て信玄の事あり

物づくさせり聞し召し時御坊の時火繩ハつゝ御尋あ

り柿の澁ニ石灰を入れて火繩を漆候へば年経ても用られ候や申

は横田又ハ城意菴あはし信玄の事と御坊と仰ありし事とを又

武田家にて鑓をゆりつる候ハ敵の肉れ中ニ鑓の残りん為ありと  
申も聞一召士の軍ニ臨むハ其君の為ぞ一射伏するハ吾  
軍の利とあり後々人を苦しむハ不仁の業とぞあれ今日より  
我家れ士の鑓を堅く詰りて仰出さるる

東照宮仰ニ物具此美難あらハ無益の事あり又重くもるも益あり  
井伊兵部ハ力もありて重き物具あらばも度々手負しあり本多  
中務ハもあつて薄手負する事も一戦ひ易くせんやうと心づく  
下部ハ薄き鑓の笠を着せしむる急なる時ハ飯とも炊  
く

鑓の笠ハ甲州でも下部ハ着るるや畿内れ方よりあり  
一丹州龜山の小野木縫殿助足輕已下の者ニ鑓の笠を着せ

くる故ニ其頃ハ小野木笠といひくるるあり

○東照宮関東御打入の後甲州よりありける秤と造了守隨兵三郎とい  
ふ者井伊直政より申て関東黄金白銀等を商賣するは定めてる秤  
を用ひらん事を願ひくはばそれより今ハ制ハ定りてせむひたり  
京ニ後藤徳兼とらふ彫物師あり東照宮関東御打入の後徳兼が  
弟子を召くるは遠國を嫌ひし後藤庄三郎より行んとて関東  
に至りて電せしむる後天下を知り召ハ願の二つ叶へんと申  
き何事ぞ易き事と仰ありさるは黄金を四つ切て通用せしむ  
と望らるる果して海内東照宮は帰るるは庄三郎が志の如く  
仰出されくるより今ハ壹歩金といふ始まり但し甲州ハ信  
玄の時碁石金といふ物ありさるは夫より前ハ碁石金の外ハ

あつてや壹歩金の碁石金は倣ひてやあつて又信長のと  
今此弁當とりの安土より始り其始の小羊の中より  
色々の物入らんとて人信せざりて狭箱も同く比造  
始りて又大坂の津田長門守始て造り出せし  
原吉丸酒井金三郎共東照宮の近習は仕へ申り伏見にて御  
庭は出させし時原御太刀を持て庭より草履をく追  
洗して蔭石の上より酒井草履とあつて人々譏  
聞し召子細を御尋ひ酒井兼原へ元下総の苗井の城主原  
一部が子候候臣が先祖原は仕へて兼原昔の主君の御  
とて炎天は居るを見らる堪候と申るは本を忘るれ士  
あり吾子孫も斯の如くありて大に御感あり

○秀吉大坂にて馬揃の時千貫矢倉の上で觀らるる黒馬の太  
徳川家此士成瀬小吉ありと申も祿ハソクと問ふ東照宮二千  
石與一置仰らるる秀吉ありれ吾も奉公せよ五万石與之  
仕へあんやと仰りて成瀬兼原御情あり候と申しや  
汝秀吉も奉公せよ我為に成瀬涙を流し不  
肖の身祿を貪りて主君を捨奉らん者と思召るるを知らずも愚  
候只疾自害して心とあつて物も申りて其と秀吉御物  
詰ありて後東照宮長臣ありて召き古より三尺の狐を託  
きしひ一人成瀬とて仰らるる小吉正成後隼人正也

つひーあや

○

北條家亡て後東照宮甲斐相模の塚三増嶺と御打廻りの時過一永  
禄年中此戰場を御覽ありしが山あり故信玄兵を押通一なる  
軍に勝あり北條家武畧は拙く山林を伐あり故ぞう一生茂  
アアアアアア信玄陣をあらへる山を林にせりと仰出たなり

○

秀吉伏見にてある日廣間又出たり一五腰の刀を見て試み其名を  
いふとてきりきり違ひたり前田玄以誠は神智のあり候よ  
と驚ききりきり秀吉笑て何の子細もあきとよ秀家の美麗を  
好む故に黄金とちりばりる刀是あり一景勝の父の時より長剣を  
好む寸の延びる刀を是よあてりた利家へ又左衛門と云一時よ  
先陣後殿の武功より今大國を領せりとも昔をわたりし革巻

○

怪しき事

柄の刀是他の主よ非ぞと思へ輝元ハ異風を好む異あり体よか  
ざりある刀是あり江戸大納言ハ大勇より一剣を頼りの心より取  
繕ひける事あり又美麗もあき刀其志よ叶ひり是を以て察し  
たると違ひたりと云きり江戸大納言より東照宮の御事あり  
謙信の許よ赤小豆粥竹俣兼光谷切とて三の刀あり竹俣兼光ハ  
越後の百姓持より一山の中を通り一雷烈しく鳴き  
アアアアアア落りしと思ひて刀を抽頭よ指當目をさだ居り  
やあつて空晴一よ刀の鋒より血流を殷よみり又或時大豆を袋  
よ入て帰るよ袋の綻びより一粒づつこぼれりしと靴よあてりて二つ  
成一ハ怪しき見一ハ靴のよびて又の縄よ出たり一當り一故  
なり双あき刀とて竹俣三河守を得一謙信後よとて弘治

怪しき事

年中川中島合戦、信玄の兵輪形月平太夫と云ふ者、鐵砲をりてねらひ、謙信馬と衆寄せ、一刀は切伏てかけ通らば、後甲斐の兵も是を見らば、輪形月ハ物具多くて切られ持たる一両筒ハ二の見通は上より切放し、さうある刀あてかゝり切しといひあつた。則ち兼光の刀あり、景勝の時京にて研せしを越後へて人々に見せて、京の水にて研せしハ、鐔の光殊更勝まゝと悦び、三河守熟々と見て、以ハ贖物にて候子細ハ、以刀をさきより上二寸背ハ馬の毛に通せし計の穴は候是を、知人外ハ、あつと申ささふとて、竹俵を京よりてさき、求る真の兼光の刀と清水の南坂より取出せかくと、石田三成は告て贖物し、る者十三人、日ハ、岡にて死刑せし、竹俵越後へ持帰りて、かの穴ハ馬の毛を通し、て景勝は見え、其後



此刀大閣は奉る秀頼に、て落武者取て和泉河内の方へ行くと聞え、此刀を献ぐ者ハ、黄金三百枚賜ふ、仰出さる、も其行方終は知人ありとて、本庄越前守繁長ハ、越後の勇将あり、後景勝上杉十郎憲景ハ、禄を本庄に與へら、本庄出羽の庄内大寶寺義興と戦勝て、二男十勝丸は庄内を與へら、本庄最上義光と出羽の千安が表とて、軍ある時最上の軍敗北せし、義光の士大将東漸寺右馬頭口惜き事と思ひ取て返し、首一つ提て越後の兵は紛れ、繁長と目をつけて、只今敵の大將を討取て候實、檢入せ奉らんと、言て馬に鑑を合せかけ寄て、正宗の刀を以て、曾を打つ明珍の曾や、筋四つ切削り、繁長右馬頭を切て落し、首添て景勝は出、刀を本庄返

興刀かり  
一興つれ、後故ありて東照宮の御刀とあり本庄正宗と云ふ

○

加勝嘉明の曹ハ形を富士山ニ造アリて名とも則富士山といふ具  
足の胸ニ天人の雲ニ衆とて蒔繪ニあがり竹中重治が曹ハ一代谷  
明智光春が曹ハ二の谷との六攝州一の谷ニの谷相並り又柴田伊賀  
守勝豊が曹ハ鉄蓋が峯とのふ是ハ一の谷より高く峙る山ありて  
斯名付し、又此餘浦野若狭守小水牛黒田長政の大水牛日根  
野が唐冠の曹原隠岐守が十王頭福嶋正則の四まの原の角本多忠  
勝の佐藤四郎が曹蒲生氏郷の銀の餘尾伏木久内がより蛤武田信  
玄の諏訪法性秀吉の八日の月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎が  
鯉の曹藤堂新七が帽子物と云ふ多し細川忠興の山鳥の尾の曹と

○

つゝも名高し関ヶ原の軍ニ忠興は山鳥の尾に曹を著銀の天衝  
の指物あり、遙く見て唯舞鶴のやうにあり、東照宮曹と  
指物と映あひて面白く、乞得させしむ台徳院殿ニ参せり  
信長江州小谷の城攻ニ伊藤七藏先が、後者取付し、  
上帯きりて刀も脇差も膝下ニ落つ七藏少し、ひまび衆込で柵の  
木取て敵三人とて代せ功名し、七藏父と若狭との相州の人ニ  
て武者修行し尾州前田村ニ居る頃信長呼出きり、七藏尾州  
三本木の軍ニ事急りて編笠をかぶり、一番槍と合せらるる名  
信長大ニ賞美して編笠と呼まき、後秀吉ニ仕へて度々功名あり  
り、紫紺井筒の故廣袖の小袖を興つり、甲れ上ニ著り、秀  
吉の旗奉行と成り



○井伊直孝の...人毎に具足櫃を持せて早く取出す志を用意  
 する者あり取出す間も遅まじやうのこゝろあはれ何時も素肌を  
 付て...具足を著るる著るるの差別を...とありと申  
 きり...

常山紀談卷之九終

常山紀談卷之十目次

- 一 馬場重久武功の事
- 一 利家白雲の琵琶と種村は與へらる事
- 一 秦桐若勇威の事
- 一 澤村大學朱柄の槍と持する事
- 一 加藤清正天草れ一揆退治の事
- 一 森本義太夫組討功者の事
- 一 朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事
- 一 伊達家れ士卒異風出陣の事
- 一 朝鮮南大門合戦前後向の備の事
- 一 國富源右衛門組討の事

一 加藤光泰大言の事

一 吉田又助川中を積る事

一 清正虎を狩る事

一 清正船を取せしむる事

一 太閤名護屋にて大言の事

一 菅政利後藤基次虎を斬る事 附 羅山先生南山銘の事

一 泗川の城は狭間を切つ時の事

一 加藤嘉明拔懸高名の事

一 浅野長政諫言の事

一 井口與市主従切名の事

一 清正の武備嚴重ありの事

一 朝鮮より虎と象をも渡す事

一 清正の士卒土穴に住る事

一 森本庄林黒白鳥毛の槍鞘の事

一 清正の花押筆畫多クありの事

一 後藤基次亀甲の車と造る事

一 和寧館合戦栗山利安武功用意の事

一 栗山利安倭約の事 附 日根野備中守黒田家より銀を返す事

常山紀談卷之十

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○馬場重八職家ハ陸奥栗屋川貞任ハ裔孫トシテ備前邑久郡北地村  
 ヨ来リ居ル其後モ安倍トシヒククハ京都ヨリ来リ馬場氏の  
 人豊原ヨリ居テ其女モ妻トシテ遂ニ馬場ト称シぬ重八稚名狹岩  
 法師トシヒテ十三歳トシテ邑久郡戸石の城主浮田大和守ヲ奉公シ  
 天文十四年浮田直家ハ乙子の城ニ在テ大和ト軍アリ直家の士  
 池田太郎三郎ト岩法師東北地村荷蓋の畠トテ槍を合せ疾を蒙  
 リテ戸石の城ニ歸リ今年十四歳アリ大和守膝ニ抱上テ疾の口モ自  
 ラ吸キテ無双の剛の者アリトシテ名モ二郎四郎ト改メサセテ其程  
 久直家花房又七近藤五郎左衛門一説ニ六星野十郎モ大将アリ

久直家花房又七近藤五郎左衛門一説ニ六星野十郎モ大将アリ

て戸石を攻二郎四郎白團扇の腰に指して一の城戸口に出る近藤見  
 て引ひ引ひ進み詞をめぐり二郎四郎軍場は臨で引と云事やめ  
 るもつひも終らぬ花房星野も手利の射手とて弓取直一是も射る花  
 房が矢の中指はあり星野が矢は二郎四郎が持つる楯をとりとらさず射  
 貫く二郎四郎物ともせぬ敵を追拂ひて帰まり天文十七年赤坂郡鳥  
 取の砦を大和守攻て軍あり二郎四郎膝の口を篋深に射させ二町計  
 引退る所は味方は泉養坊といふ山伏来て其矢を抜は足あて歩む  
 事能はぬ大和守の馬は衆て二三町引退さるる馬も返してさ  
 ま味方も隔りの敵追り来らば討死せんといふ時妹婿あり片山  
 彦三郎といふ者の弟来て馬は抱衆せらるる血鎧を越て流き朱も成ら  
 る敵見て深手負らるる見たりとらば十文字の槍を取延べ頬よりけ落

さしとらへて幾度と事とらるる漸は適まらぬ帰まり首を取て見  
 ると見ると諺ありは時ありは二郎四郎常は言々あり是十七歳  
 のころあり後二郎四郎直家は奉公一與力六十人付らるる美作三星の  
 城は浦上宗景番手の兵をやとて守らるるを安藝の毛利家より附城  
 と構へ三村家親大将とて度々合戦あり直家より馬場を加勢とて  
 三星よりさるる馬場愛宕精進とらるる五月廿四日細く流きよ行て身と  
 清むる處は敵出らるる聞直は行向へば三星より槍提さる士一人来て  
 馬場は並び進む敵を追詰らるる附城より出て是を助て城は入門内  
 を見まは混曹の兵十四五人折敷て槍の先を並べ待りけり静々と  
 引返も宗景感状を興へし直家夫より重久と名と改りて家の字と  
 やらるる備前上道郡妙禪寺の砦の合戦は重久は刀敵は槍とて相戦

溝を飛越て敵の手れ下よから入るも、躑てうづら伏し、敵勇  
 うらむてむし野と突さぐ一行ありとつと立上り切伏て首と取同郡  
 土田の軍も長六尺の餘も梶井といふ兵と討取るとも角南忍菴見  
 て白き浴衣と着右の肩とりめざ太刀打しる兵の有様ひひ辨  
 慶あぐやくもあつんと驚きうらうら則重介あり永禄十年五月十日  
 土田の上蟹目の軍に敵五人槍を横と山の上より来ると重介ハ坂の  
 下よあつて一人射倒しれども味方ひび引返す時山の腰をひき  
 退く味方敵追詰て既よ討まめづく見ゆれば返し合せ敵と切あひけ  
 味方を助けて引取り備前岡山の城主金光與次郎と直家謀を以て  
 殺し城を取得しは、近き邊り敵多かりは戸川平右衛門と城番  
 ととも寄騎六十人うら行兼り重介我うらんとし何の子細り

あぶさといふし直家は告てゆりしは重介が寄騎六十人一人と辞  
 退する者あつて戸川と與力もたつて重介加勢あつて行くこと  
 よより戸川馬場三年岡山あり美作三の宮は城と直家一時は攻り  
 時城主村上勘兵衛士卒六十人討て突て出る重介真先は進み  
 槍武者四人薙刀武者四人と戦ひて城門の際まで追打ち敵槍を枚  
 突しうらも奪ひ取て帰る高城よりの軍は直家重介と谷の受手と  
 も敵来らざるは谷より上る處は山の半は鏑砲と五段し待りけ  
 る處は行りて三段追崩も四段より打る鏑砲は右の際より臂へけ  
 て打透され敵聲とくは重介中らびしうて四段をも追はる崩  
 きる土手あつて官の鏑を傾け寄添て待りけは柴折りけは谷の向  
 かり打鏑砲脊割具足は右に肩ひり骨の内より臂を打貫き目

暗くし氣を静めて、田中藤次間近く来たり重次田中を呼ば  
け大事の手負の処所と退んとせむ追討は遣ふ爰を死所とせんと  
し藤次我一支もせむし重次五間づり歩きて郎等の肩より手  
をけ静く退くと敵慕ひ来まら藤次槍を合せ追退て歸せり鏃  
砲の中より時大木を以て袋と突通もが如く覺え物の色目分る  
只朝顔の花の色に見えく後詔をくかり備前児嶋八瀬よ  
りて軍あり浮田七郎兵衛忠家の子典太郎大将して戸川平右衛  
門岡平内已下渡海し麥飯山の敵城近き邊より草を芥す時敵  
出て追いつく典太郎馬に輪をけ味方の兵を求る處に鏃砲内曹  
の中より馬より落つ中村宗介同く討死す重次馬を射られり  
放し歩立は成ぬ月毛馬草毛馬黒馬は乗らる敵三騎重次を目ら

けて馬を乗寄る重次敵は馬を乗くし槍の鎧を後より射りて脇  
は狭く静々と退く疲まへり討死と思ひて敵引て助る戸川  
見て今日の働ゆと我一命を継ぐ重次を譽る処に寺尾孫四郎  
今日の重次を見むし重次先く見む後く見む一番は進  
む敵の馬は毛色物具へいり問は孫四郎赤面して詞あり重次  
吾槍脇は弓をりて後の證は立まよとて言て敵一人射倒し人あり  
し鷹見傳兵衛進み出て其く候ひし中納言秀家犬坂  
より備前へ下りし時雨中の徒然は浮田修理同太郎左衛門花房又  
七三人と呼で軍ののりし時前代の槍柱功の勝まら誰ぞか  
る馬場重次幸和織部寺尾孫四郎三人と答ふ秀家聞て幸和寺  
尾ハ武功ハありしと輕薄ありと聞てし重次が人は越

事多しと聞つる重父を勝き候らんありしに三人重父が武  
功ハ申又言葉も候り候らん重父真寶を諂ひ城下の近き邊まで  
引込で此頃ハ耕作してありしと秀家聞て三百石加祿の折紙を  
戸川肥後をもり重父と與へしりし事違せし重父是を  
聞愈出る心あけて迷ふ秀家も仕へば七十七で病死し士ハ假物  
もさしあつて心あつてあつ吾數度の戰場ハ臨み百死の中ハ一生  
を得てかく全くと終る中遺言し其子孫池田家は仕へしり  
種村肖雅寺ハりと粟田家も譽せあり後招く人々多し  
も仕へば前田利家懇に迎へしり出で利家種村が琵琶を彈  
む事好むと聞て白雲と名物の琵琶を贈らり其志も引  
きん利家は仕へて佐々成政と越中朝日山の合戦は目を驚き功

名と遂に其後淺野長晟は奉公して彼白雲の琵琶ハ今淺野家  
ありしや

黒田家の士は泰桐若し剛の者あり唐團扇長き一丈計もあるを  
指物より故敵見知て近付む或時物もかくて近々成て不  
意に出せば敵大に驚きて引退し其の者ありし

駿河を攻む時東照宮横目の人を召てしり皆朱の槍ハ柄  
瑠璃の柄ハ武功勝る者ありてハ持せしり近頃ハ持するの數  
多ありし心得が事あり改りし仰出さしり皆朱の柄の  
槍持せ菅蒲葦のしり付と著て通る者あり誰ぞ問は細川越中  
守ハ士澤村大學と答ふとと申くは東照宮其大學ハ若し時  
才ハとひつゝ小取の事あり秀吉二重湟の軍兵を引取時

秀吉六万計青塚に陣せしと吾小牧より押寄て引退く敵を打破  
 其時細川忠興秀吉の先陣よりありて才八真先に進みて槍を合し  
 有様今も猶目の前に見えぬ覺えりかゝる大剛の者も持ま  
 ばしとて其餘の者と禁むる事と仰らるる澤村傳へ聞今更  
 が功名と世よほぐさる忝き悦びなり

加藤主計頭清正小西攝津守行長各肥後半州を賜り一揆起  
 天草領ハ島一揆の勢い甚盛あり小西志岐城を攻ぐる天草  
 木戸の一揆の長天草民部後巻に押寄せ志岐の東に山に陣し清  
 正の先陣山岡道阿弥岡田將監南部無右衛門小野木織部瀧野三  
 位莊林隼人森本義太夫段々進み清正斑鳩平次とて先陣を見  
 せしりく又飯田覺兵衛とやいふ飯田見切て歸り平次

只今軍始らん先に進みて戦ふ逢んと云飯田あぬいふはソアに  
 よ先陣只今追立ちし戦ふ逢ふ場ははらばとてつきて歸り清正い  
 くめ問ふ飯田先陣に今打負て敵追り来らん二の勝ハ旗本に候  
 とし清正證ハソア問敵東の山に陣し地の利を得るといひも果  
 め先陣敗北し一揆まらるる来り清正高に所より横合  
 よ突てかゝり天草民部敗軍せしと三里計追討するり清正十文  
 字に槍を突折り七度槍を合せ其勢を衆して志岐の城を攻落さん  
 り清正の槍は十文字にて三日月の形あり志津の作ありと突と  
 て片鎌と成り又を拾取て佛木坂の神宮に納りし槍の鞘熊毛  
 あし不瘡煩ふ人あり其毛一筋めとて戴くもた忽落くといひ  
 傳ふ朝鮮人今に至るまで小児の啼時鬼將軍来るといひて啼やみ



くろくろくやかろくろくの猛将類もあつてあり

○ 清正一揆と攻了時或夜森本義太夫清正の前へ軍評定せしむるに  
組討ハカふよん候心剛して手きくく易き物ありと申を清正  
組討ハ危さりのあり勇ま誇る時ハ必仕損をべしと戒めしめ其翌  
日清正の真先へ森本馬を進むる処へ歩行武者一人寄合たり森  
本聞ゆ馬の上手ゆゆ敵を横きんあてひくく飛下り立上ると  
ゆゆ敵を引組で願て首をとる清正へ向ひ夕部申せしむ違ひ候哉  
とくハ清正大に賞せしむる

○ 東照宮江戸よりおろしき秀吉の使来りて朝鮮を代りしを申  
も斯て一人書院よりおろしき深く思案の体へ見えしむるひけ  
時本多正信御前近く出たり御詞もあやあつて正信殿ハ朝鮮

○ 渡海あてまよと申猶黙然とせしむるを斯く三度よ及て  
後何事ぞか一たりや聞へる箱根を誰に守らんべしと仰あり  
む正信さくらく御思慮定まらんとて退出一しを

○ 朝鮮を伐る時関東の諸将も兵を出さる伊達政宗ハ遠國への故り  
騎兵三十騎銃砲百挺槍百本と軍配を定めしむる千計ハ士平を  
引具へ天正十九年正月九日岩出山を打立二月十三日京へ着小西  
加藤ハ先陣より岐阜中納言秀信を始りて関東の諸将師を出さ  
る其道ハ聚樂より虎橋を大官へ押通る政宗の旗三十本緋地は金  
比丸付し具足着て弓銃砲の者も同し出立し銀のけしけの刀脇  
差金比しき笠ききり馬上三十人黒衣の金の半月の出し豹比皮  
又ハ孔雀の尾熊の皮しるくの馬甲し金比のけしけの刀脇差あり

もくやく計ある中も遠藤文七郎原田左馬介ハまた添木太刀  
ざ一文計は作て帶りし鞆尻のきりぎりすの金具を真中設て  
糸を結び肩より馬に乗り見物の群衆政宗此軍兵押通  
る時目を驚らけ出立あがが一同又もあきとたたくるや

明の援兵朝鮮よ来て平壤ありて練光亭より日本の兵を望  
し江上よ往來する者大船を荷ふ日光下射て電の如し是  
ハ真の劔よあが白蠟を沃ぎる物ありし事懲怒録よちを  
し伊達家の二士此木劔のこころや

朝鮮南大門の軍ハ文禄二年正月廿六日此事あり明の援兵鴨緑  
江をわたり押来る小西行長かあら引退く時は小早川隆景ハ開城  
府よ止一軍せんと待りけり浮田秀家使を以て都城よ引

返して一死軍あてりと申しけり隆景吾日本を打立しよ  
異國よ討死せんとおひ設てり年老候ひぬ今生の思ひ出異國  
此大軍より合せ大國の耳目を驚る軍して屍を戦場よきと  
と存むる所ありし引取ん氣色無るは又大谷吉隆を遣して  
誠又雙あは志古の名將も是ハ過しはがて二万計の兵て大  
軍よ取巻き空しく討死めん事口惜く候只疾都城よ入て日本の  
軍れ先陣せし候へり隆景さ日本先陣ハ隆景仕ら  
うり候て候入先陣をばうけんとて黒田長政久留米秀包打  
連て都城よ歸らり南大門の外碧蹄館に陣せり廿六日  
の曙よ李如松の軍押来る旗を立てぬ何千万とも測るる秀家  
を始して大軍よ野合の合戦危く都城よ楯籠らんとし

時立花宗茂目を見出、刀の柄より手を懸敵、はくはがて逃り、  
 様や候、只馳合せ蹴散して候り、物とく勇まはるゝ、誰う先陣  
 せん、と、隆景吾先陣せん、と兼てつひ事、誰へ、と、あれ思ひも  
 へびとて、頓て陣を進り、士大将粟屋四郎兵衛村上、彈正野嶋掃  
 部、三千計、もろさ、さ、さ、んで相戦ふ、立花宗茂、久留米、秀包、毛利、元康、六  
 千餘、奇兵となり、右の方三町餘、陣せ、横様、なる隆景旗  
 本、一万餘、と率ゐて、一文字、切て掛、忽敵を討破、首數多、得ら  
 せ、宗茂取、首二つ、鞍の四方手、付、隆景の方、来ら、見  
 て取取、見事、候と、い、宗茂、毎も仕、候と、答、は、  
 此軍、い、始、時、黒田、長政、唯一騎、歩の士、六七人、召具、隆景  
 の旗本、来、隆景、来、候へ先陣の粟屋、力を添、

へと言、長政、悦びの色、面、あ、り、て、兼、候、と、先、陳、ふ、向、  
 け、殊、寒風、吹、長政、大、綿、帽子、を、被、先  
 陣、行、て、め、ので、世、聞、水、牛、の、首、の、緒、を、  
 隆景の軍兵、是、を見て、軍、勝、勇、長政、  
 廿五歳、武、勇、人、は、信、  
 或、説、漢、南、明、の、援、軍、大、軍、あ、り、聞、  
 吉川、元、春、先、陣、元、春、勇、猛、の、名、高、故、あ、り、元、春、軍、兵、を、後  
 面、て、敵、を、見、敵、近、く、あ、り、時、士、大、將、某、焼、飯、を、十、  
 ち、来、時、候、元、春、是、を、五、つ、食、  
 士、大、將、二、つ、食、残、を、近、習、の、者、と、與、得、  
 敵、令、二、町、計、成、時、元、春、下、知、一、同、向、直、突、

かて敵を追崩し、傾て引取き、目よ餘る大軍は逢て  
士卒氣を奪き見崩き、元春おひてかくせ、いん  
て是誠は味方の氣を挫し、將畧して元春は關西無双の  
勇將なる事誰々非間なき、元春は朝鮮陣より前死  
去あり、隆景くせ、傳へ誤りも知らず、  
南大門の軍は明れ兵と追、秀家の士國富源右衛門と剛の者  
大カあり、敵は追付て三尺餘あり、刀を取、三  
刀で斬、甲堅くて手も負む、國富刀を捨飛く、引綱  
よ彼敵國富を取て押へ、大磐石を横く、  
如く國富脇差と抽て、二刀を、甲も通ら、己は危  
く、時味方數十人落合て敵を討取り、

朝鮮にて秀家を始都城に在り、加藤清正進で行程數日を備り  
諸將糧盡んとする時、加藤遠江守光泰獨云、清正都城を放きて敵  
向ふ人々都城を去て食は就んとせば、清正を捨殺すべし、今爰を去る  
もの、僕男子の交は、清正を捨ん事日本の恥あり、人々糧  
既盡、遠江守怒り砂を喰ん様も、  
砂は、遠江守居大高は成て、汝等砂を喰ん様も、  
我故ふべし、福嶋正則を、見て、市松の間の、  
成、又秀家に向て、今中納言殿と敬ひ申し、  
よ、中納言と申へ、清正を捨殺し、恥を異國に、  
い、坐を立所、清正糧盡て都城に引退き、三里討の近所、  
一、昔來き、遠江守は清正と生死を同じくせん、

めくわく

朝鮮の平安川の深さ八九尋四五百石積の船の往来ありて日本よ  
 てへ見ざる大川ありが川の廣さと諸家の士或ハ七八町十町或ハ二三町  
 あんといへども審あぐれ黒田長政の士吉田六郎大夫雅名六之介後壹岐  
 以時六郎大夫とす  
 又助父子は見積り候へと下知せしるかやうの事は慣じ候は覚東  
 あいと辞さるが父子が組は功者もあつてといひて翌朝又助組  
 比士を引具し川岸は出川の向は朝鮮人三人見えたり又助小柳権  
 七八長高き者ありあの向は人退るる内は急ぎ堤の上を行き指  
 物さる時踏もつと一言含み推せ走り行其は向の又といひく  
 見ゆるとは指物を振るは立ちしめ即其間を打ては八町五段あ  
 り長政聞て又助二十一歳老功の者あり劣らざると称美せり

朝鮮にて何きの所ありき清正の陣大山の麓ありて虎夜  
 来りて馬と中より引ぎけ虎落の上を飛出たり清正口惜き事ありと  
 怒りて小性上月左膳とも虎来て噬殺せり清正夜明と山を  
 取巻て虎と狩りて一疋の虎生茂りて萱原をかきけ清正を目  
 みて来り清正大あつ岩の上は在て銃砲を持ねりて其間三十  
 間計虎清正を睨みて立止る人々銃砲を揃て打んとせりと清正下  
 知りて打せり候も自打殺さんとの志あり斯て虎間近く猛り来て  
 口を開きて飛くる處をうけりて咽り打込はばそとて倒れ起上  
 らんとせり候も痛手あり終は死しぬ

○  
 清正朝鮮にて大川に打臨む向の岸は船を繋ぎ陸は陣屋ありて旗  
 を立らるるありて見よ鷗岸は添て泛るる敵はあきまき誰

水練の者あゝ船取来まき下知せしは果して清正の言に  
又清正の陣所は糠をくちて馬糞よくくしりて清正藁を  
切て豆よきへて飼へしは馬の力落さるる

○ 明の援兵大軍して朝鮮よ来て日本の軍危しと大閤聞き軍評定  
ありし時浦生氏卿進み出何程の事候べき氏卿は朝鮮を賜  
候へば切取りて打破るべきは太閤是より氏卿  
此大志ありと思ふは又同時隆景使を以て隆景が存する所  
は十萬の軍兵渡海せし城々を守らる隆景先陣して明朝よ押し  
北京を攻落し一以旨申せし申て候といふ秀吉小早川の智謀さ  
らあらん人々聞く聞きよ秀吉功を遂げし死するも秀次と大将  
して明朝よ攻入ん時我魂魄雲よ衆して鉄の指とつて唐上の奴

原を一々蹴りしは捨あんにれをむしも柘榴を嚙て火とあせ  
者のありしと聞其小男の名を忘まらんとしは施薬院秀成夫  
は北野の天神に御事して候と申す秀吉は雷の如くて天  
よ上りし言傳ありて吾陰囊の垢もあめ物とて大音の如  
しを聞人びは驚きしなり

○ 黒田長政朝鮮の全義館に陣せしは曉俄に騒がるる敵夜  
討しや寄るる井樓よ上りしは虎馬屋よ入りしはあはれ  
きて出する者も無ありは管政利刀を提て走り向ふ虎咆るる處を  
飛違へて腰骨を深く斬りしは席前足して立あがり愈猛りて危る  
し處よ後藤基次うけ来て肩先を乳の下りて切つるは管得し  
やく席の眉間を切割て殺しぬ長政汝等先陣の士大将とて下

知<sup>チ</sup>き<sup>キ</sup>身<sup>ミ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>戦<sup>セ</sup>と<sup>ト</sup>勇<sup>ユ</sup>と<sup>ト</sup>争<sup>ソ</sup>ふ<sup>フ</sup>事<sup>シ</sup>ね<sup>ニ</sup>あ<sup>ア</sup>げ<sup>ゲ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>は<sup>ハ</sup>政<sup>セイ</sup>利<sup>リ</sup>  
が<sup>ガ</sup>刀<sup>タ</sup>は<sup>ハ</sup>林<sup>リン</sup>羅<sup>ラ</sup>山<sup>サン</sup>銘<sup>メイ</sup>と<sup>ト</sup>作<sup>サ</sup>て<sup>テ</sup>南<sup>ナン</sup>山<sup>サン</sup>と<sup>ト</sup>名<sup>ナ</sup>付<sup>ツ</sup>く<sup>ク</sup>周<sup>シュウ</sup>處<sup>ヂョ</sup>白<sup>ハク</sup>額<sup>ガク</sup>虎<sup>コ</sup>の<sup>ノ</sup>故<sup>コト</sup>事<sup>シ</sup>あり<sup>リ</sup>銘  
と<sup>ト</sup>曰<sup>イハ</sup>す<sup>ス</sup>

箴<sup>セン</sup>彼<sup>カ</sup>南<sup>ナン</sup>山<sup>サン</sup> 山<sup>サン</sup>惟<sup>タカシ</sup>劍<sup>ケン</sup>鉞<sup>ケン</sup> 苛<sup>カ</sup>政<sup>セイ</sup>除<sup>ス</sup>去<sup>ス</sup> 酷<sup>ク</sup>吏<sup>シ</sup>逃<sup>タ</sup>藏<sup>ス</sup> 截<sup>セツ</sup>邪<sup>ジャ</sup>斬<sup>ツ</sup>侯<sup>コウ</sup>

惟<sup>タカシ</sup>刀<sup>タ</sup>在<sup>ル</sup>箱<sup>ハコ</sup> 惟<sup>タカシ</sup>其<sup>ノ</sup>言<sup>ハシ</sup>虎<sup>ノ</sup> 若<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>真<sup>ニ</sup>偽<sup>ニ</sup> 傳<sup>ツ</sup>之<sup>ヲ</sup>万<sup>ノ</sup>世<sup>ニ</sup> 為<sup>ス</sup>子<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>常<sup>ニ</sup>

朝鮮<sup>チョソ</sup>機<sup>キ</sup>張<sup>テ</sup>て<sup>テ</sup>長<sup>チヤウ</sup>政<sup>セイ</sup>虎<sup>コ</sup>狩<sup>リ</sup>せ<sup>テ</sup>け<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>虎<sup>コ</sup>一<sup>イチ</sup>尺<sup>シツ</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>群<sup>グン</sup>と<sup>ト</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>か<sup>カ</sup>け<sup>ケ</sup>来<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>

菅<sup>スガ</sup>六<sup>ロク</sup>之<sup>ノ</sup>助<sup>タケ</sup>が<sup>ガ</sup>足<sup>タデ</sup>輕<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>肩<sup>カド</sup>を<sup>ヲ</sup>噬<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>後<sup>ノチ</sup>に<sup>ニ</sup>擲<sup>ナゲ</sup>き<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>一<sup>イチ</sup>人<sup>ニ</sup>を<sup>ヲ</sup>腕<sup>ウデ</sup>を<sup>ヲ</sup>噬<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>投<sup>ナゲ</sup>倒<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>

菅<sup>スガ</sup>六<sup>ロク</sup>之<sup>ノ</sup>助<sup>タケ</sup>其<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>朱<sup>シュ</sup>具<sup>キ</sup>足<sup>ソク</sup>と<sup>ト</sup>著<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>目<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>め<sup>メ</sup>く<sup>ク</sup>ん<sup>ン</sup>忽<sup>トウ</sup>飛<sup>トビ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

菅<sup>スガ</sup>二<sup>ニ</sup>尺<sup>シツ</sup>三<sup>サン</sup>寸<sup>ソウ</sup>あり<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>刀<sup>タ</sup>を<sup>ヲ</sup>抜<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>忽<sup>トウ</sup>に<sup>ニ</sup>切<sup>キ</sup>伏<sup>フ</sup>せ<sup>テ</sup>り<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>刀<sup>タ</sup>今<sup>イマ</sup>に<sup>ニ</sup>菅<sup>スガ</sup>の<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>持<sup>チ</sup>た<sup>テ</sup>

傳<sup>ツ</sup>ふ<sup>フ</sup>備<sup>ビ</sup>前<sup>ゼン</sup>吉<sup>キチ</sup>次<sup>ジ</sup>が<sup>ガ</sup>作<sup>サ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>大<sup>ダイ</sup>德<sup>トク</sup>寺<sup>ジ</sup>春<sup>シュン</sup>菴<sup>アン</sup>和<sup>ワ</sup>尚<sup>ショウ</sup>其<sup>ノ</sup>刀<sup>タ</sup>は<sup>ハ</sup>莞<sup>ワン</sup>秦<sup>シン</sup>と<sup>ト</sup>名<sup>ナ</sup>を<sup>ヲ</sup>付<sup>ツ</sup>け<sup>ケ</sup>た<sup>テ</sup>

ア<sup>ア</sup>秦<sup>シン</sup>ハ<sup>ハ</sup>虎<sup>コ</sup>狼<sup>ロウ</sup>の<sup>ノ</sup>國<sup>クニ</sup>と<sup>ト</sup>言<sup>ハシ</sup>ふ<sup>フ</sup>故<sup>コト</sup>に<sup>ニ</sup>こ<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>羅<sup>ラ</sup>山<sup>サン</sup>林<sup>リン</sup>子<sup>シ</sup>も<sup>モ</sup>銘<sup>メイ</sup>と<sup>ト</sup>作<sup>サ</sup>ら<sup>レ</sup>た<sup>テ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

去<sup>キ</sup>一<sup>イチ</sup>説<sup>セツ</sup>あり<sup>リ</sup>

○ 文<sup>ブン</sup>禄<sup>ロク</sup>五<sup>ゴ</sup>年<sup>ネン</sup>朝<sup>チョウ</sup>鮮<sup>セン</sup>と<sup>ト</sup>泗<sup>シ</sup>川<sup>ケン</sup>と<sup>ト</sup>慶<sup>ケイ</sup>の<sup>ノ</sup>城<sup>シヨウ</sup>を<sup>ヲ</sup>構<sup>カウ</sup>へ<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>時<sup>トキ</sup>門<sup>モン</sup>脇<sup>ワキ</sup>の<sup>ノ</sup>狭<sup>セキ</sup>間<sup>カン</sup>を<sup>ヲ</sup>垣<sup>ケ</sup>見<sup>ミ</sup>

和<sup>ワ</sup>泉<sup>セン</sup>守<sup>シュ</sup>家<sup>カ</sup>純<sup>ジュン</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>切<sup>キ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>下<sup>ゲ</sup>知<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>長<sup>チヤウ</sup>曾<sup>ソウ</sup>我<sup>ガ</sup>部<sup>ブ</sup>元<sup>ゲン</sup>親<sup>シン</sup>見<sup>ミ</sup>て<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>胸<sup>ムネ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>

よ<sup>ヨ</sup>り<sup>リ</sup>腰<sup>ウサ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>當<sup>タ</sup>て<sup>テ</sup>切<sup>キ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>和<sup>ワ</sup>泉<sup>セン</sup>守<sup>シュ</sup>下<sup>ゲ</sup>げ<sup>テ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>敵<sup>テキ</sup>城<sup>シヨウ</sup>内<sup>ナイ</sup>を<sup>ヲ</sup>

規<sup>キ</sup>之<sup>ノ</sup>一<sup>イチ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>元<sup>ゲン</sup>親<sup>シン</sup>必<sup>カナラ</sup>門<sup>カド</sup>へ<sup>ニ</sup>掛<sup>カ</sup>け<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>内<sup>ウチ</sup>を<sup>ヲ</sup>見<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>城<sup>シヨウ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

一<sup>イチ</sup>支<sup>シ</sup>も<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>上<sup>ウエ</sup>て<sup>テ</sup>切<sup>キ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>敵<sup>テキ</sup>の<sup>ノ</sup>首<sup>カビ</sup>に<sup>ニ</sup>上<sup>ウ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>射<sup>イ</sup>つ<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>笑<sup>ウ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>

○ 慶<sup>ケイ</sup>長<sup>チヤウ</sup>二<sup>ニ</sup>年<sup>ネン</sup>朝<sup>チョウ</sup>鮮<sup>セン</sup>の<sup>ノ</sup>番<sup>バン</sup>兵<sup>ヘイ</sup>船<sup>セン</sup>數<sup>スウ</sup>百<sup>ヒャク</sup>艘<sup>ソウ</sup>を<sup>ヲ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>リ</sup>島<sup>シマ</sup>に<sup>ニ</sup>置<sup>オキ</sup>て<sup>テ</sup>日<sup>ニッ</sup>本<sup>ポン</sup>の<sup>ノ</sup>軍<sup>クン</sup>船<sup>セン</sup>を<sup>ヲ</sup>防<sup>ブ</sup>ぐ<sup>ク</sup>

諸<sup>シヨ</sup>將<sup>シヤウ</sup>番<sup>バン</sup>船<sup>セン</sup>を<sup>ヲ</sup>衆<sup>シュウ</sup>取<sup>ク</sup>べ<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>評<sup>ヒヤウ</sup>定<sup>テイ</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>加<sup>カ</sup>藤<sup>トウ</sup>左<sup>サ</sup>馬<sup>バ</sup>助<sup>シュ</sup>嘉<sup>カ</sup>明<sup>メイ</sup>目<sup>メ</sup>は<sup>ハ</sup>餘<sup>ヨリ</sup>に<sup>ニ</sup>大<sup>ダイ</sup>軍<sup>クン</sup>を<sup>ヲ</sup>

小<sup>コ</sup>勢<sup>セイ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>争<sup>ソ</sup>う<sup>ウ</sup>打<sup>ウ</sup>勝<sup>シヨウ</sup>へ<sup>テ</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>ひ<sup>ヒ</sup>ら<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>手<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>者<sup>モノ</sup>に<sup>ニ</sup>下<sup>ゲ</sup>知<sup>チ</sup>り<sup>リ</sup>五<sup>ゴ</sup>人<sup>ニン</sup>十<sup>ジュウ</sup>人<sup>ニン</sup>

船<sup>セン</sup>に<sup>ニ</sup>衆<sup>シュウ</sup>番<sup>バン</sup>船<sup>セン</sup>の<sup>ノ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>漕<sup>ソウ</sup>向<sup>キヤウ</sup>ふ<sup>フ</sup>嘉<sup>カ</sup>明<sup>メイ</sup>法<sup>ホウ</sup>を<sup>ヲ</sup>背<sup>セ</sup>く<sup>ク</sup>者<sup>モノ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>押<sup>オシ</sup>留<sup>リウ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>追<sup>オウ</sup>々<sup>々</sup>

船<sup>セン</sup>を<sup>ヲ</sup>出<sup>デ</sup>さ<sup>サ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>我<sup>ガ</sup>押<sup>オシ</sup>止<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>さ<sup>サ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>言<sup>コト</sup>捨<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>船<sup>セン</sup>に<sup>ニ</sup>衆<sup>シュウ</sup>漕<sup>ソウ</sup>出<sup>デ</sup>を<sup>ヲ</sup>

河合庄太夫同庄次郎菟野作右衛門と懸の三介五人打乗て番船の中へ押入り三介船は何も問正中本船に着くと下知りやう乗移了敵其勢ひは恐き船底へ入て剣を抜鏃を揃へて待てるは嘉明少もたうらへ飛込れば従者も残るは續て飛入てあや切りて本船を乗取りしは諸將も追續さ船を押し出り来り既は鉄砲の薬火移り焼船をせりしものおや河合庄次郎ハ十六歳あつたが飛入とて海へ飛込溺死し佃次郎兵衛加藤権七郎勝も功名せり嘉明一人の武勇し七月十六日白昼に押寄せ番船百二十艘一艘も五百人三百人乗組しと僅の士卒して悉く海へ切流り古今稀ある事どもあり秀吉感状と與へ六万二千石と増禄して十萬石と與へら池田家の長臣池田河内が妻ハ嘉明の女とて河内が男伊賀ハ外孫

あり伊賀若き時外祖父は武功此事を尋ねり今ハ年老て過つて皆志きしりとのいひて止め島船軍此事を問は十五六歳ある小性の船は乗移り時矢は中へ海へ落て死し不便の至りしと只此事を語りて他の事と及ざりしと

太閤名護屋より朝鮮の軍はと怒り諸大将を集め今ハ秀吉自ら押渡して三十萬の軍勢を三手りて利家氏卿は先陣させ三道より打破り真直は明朝へ攻入る日本之事ハ徳川殿おろし心にかゝる事ありしは東照宮聞し利家氏卿は向りし人多き中より撰び出さして一方の大將とししと面目して候へ抑我等弓箭を取て年寄候かゝ時よ人の跡のみ残りし口惜き事あり必一方先けを養ふと仰らる



浅野彈正少弼長政進み出て暫く候殿下此年月の御振廻り  
 小替アてこそ候へ古狐の入替アてこそ存ありと申も果ぬ大閤大  
 怒アヤあ秀吉が心は狐の入替アてこそ所謂屹と申せ申換ふ首打  
 落しんりれをてみくされは長政ちつとも騒が長政が如き何十人が  
 首刎らるゝも何條事の候べきもくくも泥軍起して朝鮮八道ハ  
 申るや及ぶ日本六十餘州を父を討せ兄弟を失ひ夫を離き子先立  
 歎き悲しむ者満々なり夫は兵糧の運送相加り六十餘州の内悉く  
 あれ野とある合發向候ひあらん五畿七道盜賊發起せん事必然あり  
 徳川殿の思召候とも争り是を防ぎんもへさ爰を思ひ召て先陣  
 仰候らん殿下むくこれ御心あらん是れは事の御心付のあ  
 るべき是唯事のあらん一定古狐の入替アてこそ候郵人の詞人なり



驚ハ必人よとくくく此事候と憚る所あり申放る大閤何  
 あもてよ巴が主よ斯雜言もくく奇怪ありて飛くらんくくく  
 人々押隔り長政はさぬ体く人々式代して静坐を立て陣  
 所は帰るか所は肥後國に逆徒一揆を企つ聞えく大閤大  
 驚き長政を召出し汝が嫡子左京大夫幸長罷向て切静むべと下  
 知せられ本多中務大輔忠勝を添て肥後國へ向らるる  
 朝鮮くく何もの所の事くく廣き野に道ありて向ふ山の麓あり  
 大穴を構へ射手を伏置て行くる日本人餘多射殺くく黒田家の  
 兵井口與市が從者山崎喜藏に參て見申さんといひあへど走  
 行井口も馬より下り走入る山崎射手三人斬伏る井口續て攻入  
 追散る井口恩賞望候りあり朱柄の捨免され候へといふ物し

も寄合て武刃度重るる或ハ一日中ハ首七つ取時ハ朱柄の槍り  
まると申事の候輕々一詩一がごき事とよ井口是をま  
其後一日ハ首七つ取て朱柄の槍り

朝鮮ハ清正全州ニ在る時釜山海より十里餘の程日本の軍兵  
城々を守て七八里或ハ十里計して伴の城を設く清正を太閤  
呼まし日本ハ歸りて打立まら戸田民部少輔高政密陽あり  
て清正ハ舊友ありてあへて用意して待まら士大将真鍋五  
郎左衛門神谷平右衛門を途中まで迎へ四里計出まら清正の先  
陣見ゆ其頃ハ四方ハ敵あり無事あり二人とも革羽織袴して出  
る清正の軍兵皆物具して燗食付け旗をとり立磨筒の鉄砲五百  
挺真先ハ押て鉄砲ハ火繩とりみ火をつくり清正ハ溜塗の物具

銀の長烏帽子の曹比緒より頬當脚當して草鞋をとり銀の九木馬  
蘭ハ馬印を自ら背ふき一月毛の馬ハ白泡をとり来たり二人馬よ  
下りて迎へる清正見て民部よりの迎ハ使者疊折あり早くそれ  
へ着陣せん殊外ハ人々垢付ぬ風呂をとて下々湯を賜りあふ大  
慶あふん疾帰して申さる詞を懸る二人兼候とて馬  
一乘急ぎ歸りてかくし程あり清正着陣せし屏重門より入隊  
して民部近習の士二人寄て清正のさし馬蘭を取て旗籬よ  
清正撮よ上らるハ草鞋の紐を解脚當の緒を解く時清正  
腰に付たる排曇子の袋を坐敷へ投入しと落る米三分計  
味噌銀錢三百文入らる馬印をとり腰のつり合是にて能とあり  
民部驚き十里近き敵もあつてつり合事ごとく清正との大

事と心得しむるに由断大敵といふ事あり我物具せば身と安ん  
だるにわづらひも左あらん皆懈る夫故も身の苦しみも懈る  
為にわづらひも左あらん皆懈る夫故も身の苦しみも懈る  
武功虚名ありん事と慮まふあり凡上を學ぶ下とて大将甘げ下ハ  
大に怠るればあはれ常々陣法を嚴し事候上一人の心下方民  
通し

○ 朝鮮より虎と象とを引來る象ハ柔馴のれあはれ細き綱にて引  
たり虎ハ鍔の鎖を付左右より七八人取付て引來る朝鮮渡海の  
諸將一旦名護屋に帰集らば時彼虎ハ大力の男あらず左右は鎖  
を引くごとくしてあはれ幾らも並居る中を通る人  
驚き清正膝立直し拳を握り臂を張て糸を引く

○ 虎もあがり立上りて清正をあらとて打過ぬ嘉明ハ壁より  
きて居眠して在り虎通て過る後も初よりあはれやありて目  
を開き何事と駭かれ候を虎を引通さる故にやといふ静ふら  
慶長二年二月清正再び朝鮮に渡らば船の着る所ハ北地あり  
て寒風烈し土民ども土穴を穿ちて其中に住居し日本の軍兵  
押渡りし聞逃走し清正の兵ども土穴に入りて臥し清正漫  
民を殺し非道を嚴に戒し後ハ商人も物を馬に付て來賣  
し寒氣以外の外は甚しうて馬の毛もつり此下アてかきりて鳴  
子聲土穴の中より聞えり王元美ガ詩ハ風劈面疑裂凍粘髮有  
聲しりるわづらひ合はれ軍兵昼ハ終日風砂の中より立夜ハ土穴より  
しりる故皆雀目と成しと土民教て糞を食して癒る

○朝鮮にて何もの所の戦ふや清正の士大将森本義太夫流矢の臂と射さるる斯る處に庄林隼人馳来ると見てつふ手負うる此矢抜てつられれとて庄林馬より下て抜て捨まが森本さても快き事うかとのいもあへども馬よりひりやと打乗一鞭打てつとけは出り庄林殿續りまよと言捨て敵に逢首を得る二人とも清正の士大将大剛の者あり森本が槍ハ白鳥毛を鞘と一庄林ハ黒鳥毛を以て鞘とハ世の人黒鳥毛白鳥毛といひひりり

○朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時清正の花押殊に筆畫さあうやひひりり福嶋正則冷笑ひて病重くありて遺言の時此状ありんといひりり清正我ハ存ぜん戦場ニ屍とていひりりあく逃て褥の上へ死んといひ思ひ設く候はば遺言状何う候

べきと答へりり正則詞ありり

○晋州の城を攻りり時黒田長政の士大将後藤又兵衛基次亀の甲とて車を作て出せり厚板の箱を拵へ内は強き切梁を設け石を落しりり箱の摧くも手當とて箱の内へ後藤入て棒の棒と指車を箱に仕り進退自由廻るやうにして城際へ押詰石垣に崩して衆入りり

○慶長二年日本の軍後渡海一黒田長政の先陣栗山備後利安後藤又兵衛基次衣笠因幡母里但馬黒田宗右衛門以下三千計和寧館全義館一陣せり処に明の援兵押寄る其より長政は告よと書簡と書くるを利安見て敵より候間早々教りていり詞やあ書改り上敵押寄せ候先陣ハ少も心と勞せり事あるべしと

こも申べくとして直させぞ告ぐる多斯て敵寄来まら利安先陣志  
て打破りし長政聞ひひく打出てもみよんてかろきく  
敵早護龍臺とて敗北し先利安が陣所に入て何とて軍  
事をや候と申も終らぬ利安目を見出し押寄り敵は辞退ま  
あり何とて疾告来らざらんとし候し傍より告申も書簡の詞  
を書改りて遅うらと申も利安夫の臣が改りさせ候子細ハ志  
らくありはく疾救らせ候へと申もとも行程隔り候は無益あり  
敵ハ四方計も候り味方必死を思ひ定て軍をさきて候しとて屍  
も異國の野原まら候も名ハ後の世に傳りし黒田が先陣の剛  
壯者ども大敵は取巻を深く討死せりと云きあんとて救らせ候

つと申さんよ後日は黒田が者ども主君の様ひを待たし皆打殺され  
たり人よ笑ひまはし是日本の武名を穢ま候りし弓箭取身を  
かりゆも名を惜く候へ且ハ今生の暇乞と存して告奉る書簡殊更  
よ取ら申さく申さば長政大に悦ばらる

○

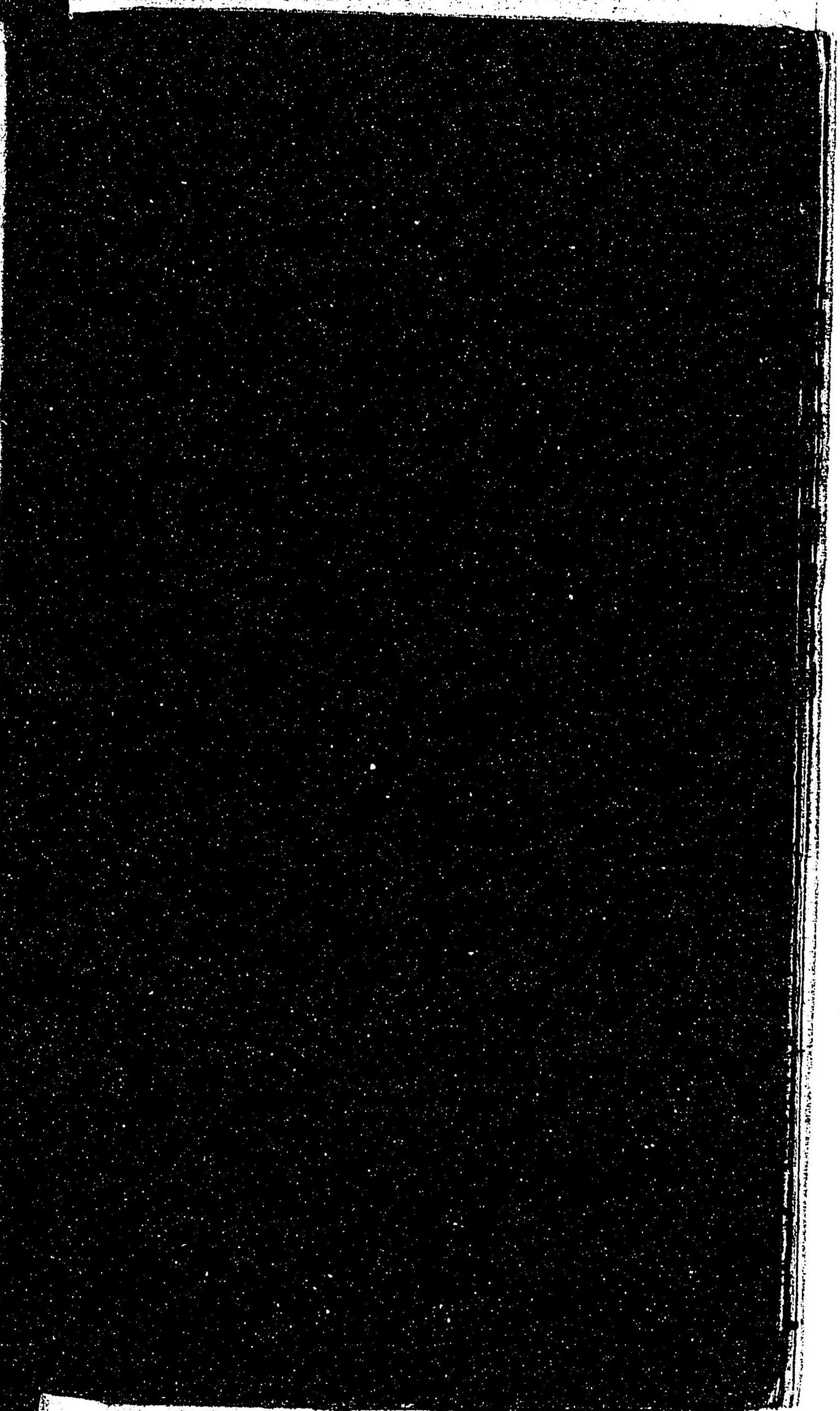
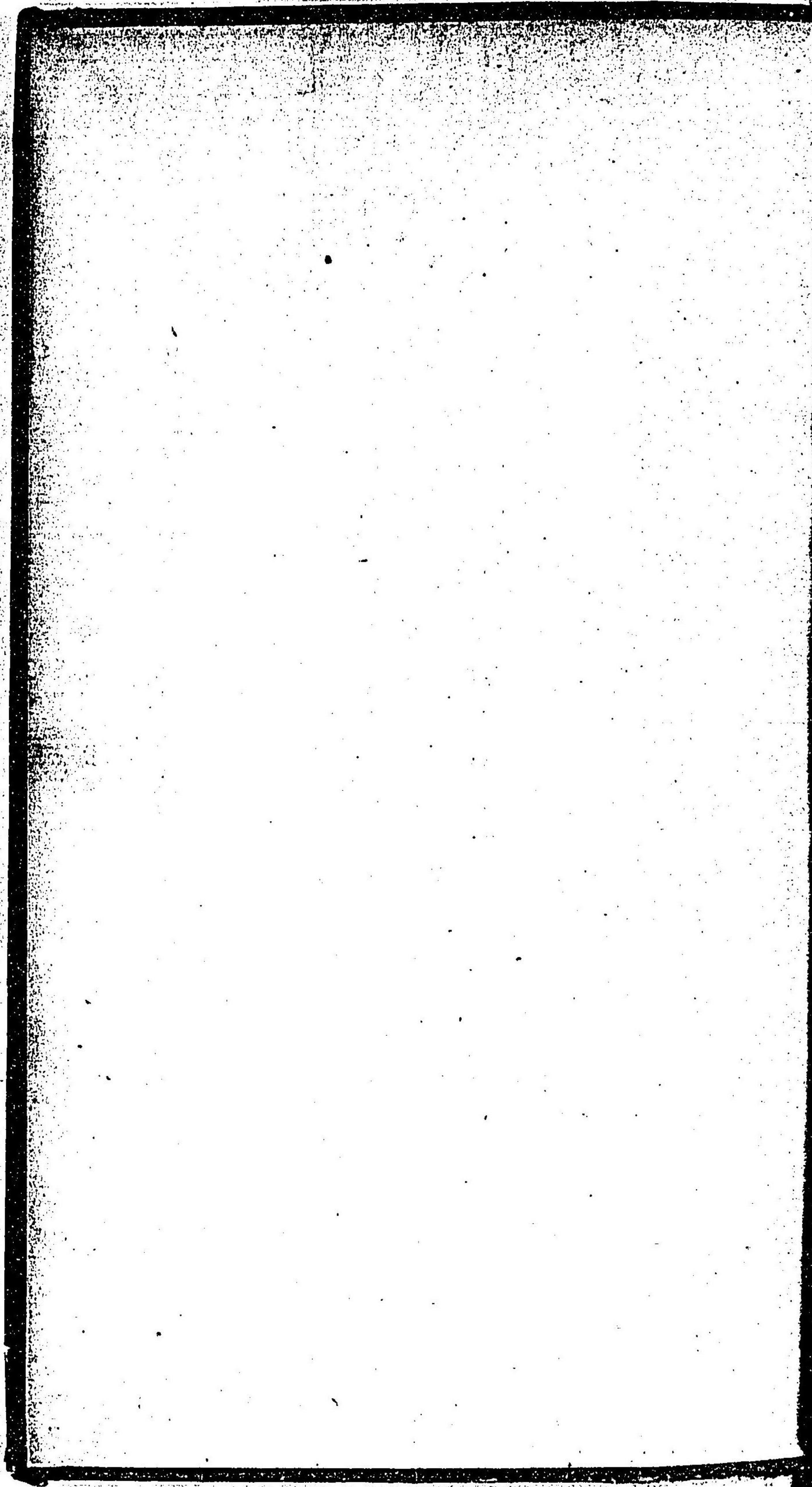
利安若き時ハ善人といひ中頃ハ四郎兵衛といひ長政は筑前を賜マ  
一時名鳴の城に長政居て左右良の城に利安を置きけり禄一万  
五千石極めて候り人よあそ人の衣服は美麗あるを見てハ羨晴と  
いふものありといひ教へ又價高く馬と購ふ者あはばぐりの馬も二疋  
の用もあはし何とて無益の費まらざと戒りたりも事り臨  
て金銀を惜みの心や一徒者まらるり隣に貪乏を助る事尋常の  
人よ大に踰るるなり

日根野備中守朝舞あそび使つかとしてゆく時黒田如水くろたにしみづ銀ぎんをかき帰かへせて  
後如水のちしみづのりくは行いく如ごと水みづ近習ちかじゆの士しは先まに人の贈たまり銀ぎん百枚取出ひゃくまいとせ  
して其骨そのかみを煮ゆてりてあし候まをへといひいふ吝嗇しんさくの甚おそろしき事こととして  
わしひ居ゐる頃ときて肴さかなを出だし酒宴しゆえんあり後彼借のちかへる銀ぎん百枚取出ひゃくまいとせ  
返かへせし如ごと水みづももり返かへしたる心こころをてり候まをりも異ちが  
國くには渡わたらるるより頼たのむ贈たまり参まゐらせしありして受取うけとり  
て止め栗山くりやまも如水にしみづの風かぜよあひくさるるや君臣きんしんとん頼母たのぼしき事こと  
ぞう栗山の戒かいもして惣もて世よの有様ありさまを見みるは士しとりさるる人の  
体ていも無下むげよりちまきし多おほく美衣みいを着きるより明暮酒宴あきくれしゆえんして  
馬具ばぐ武具ぶぐやうの物ものいふあまやんあまの多おほく商家かみや典當えんどう或あるは  
茶ちやの湯ゆよとて古ふるびくは器うつは何なにの用もちもあま物ものは數金かずかを費つす

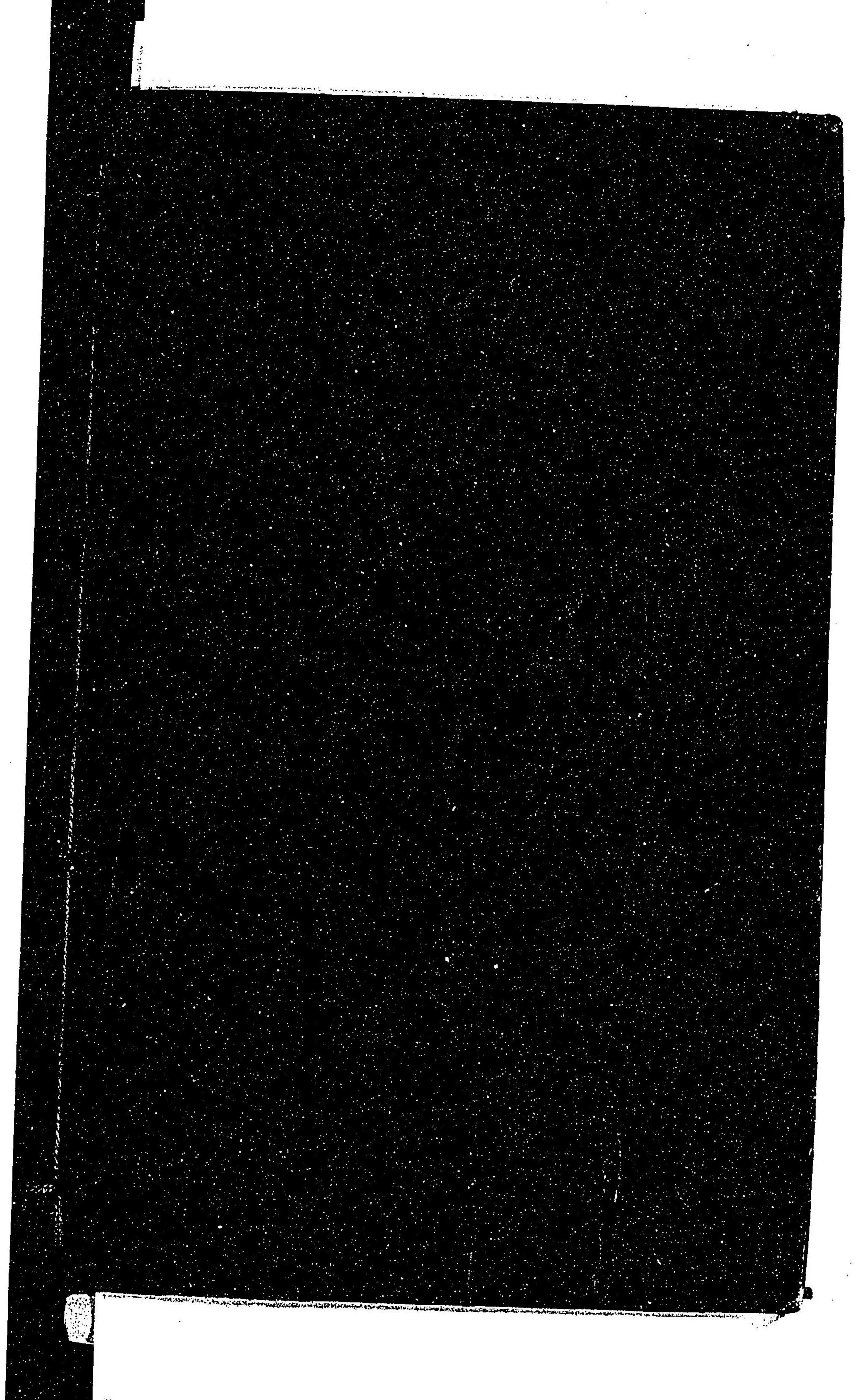
博奕ばくあししてあめぬ戯あそは夜よを明あけ斯かむるや無二むによりひらりたる人ひとは  
黄金こがねを奪うばひて其人そのひとの赤髭あかひげあまも願ねがは是これハ盗賊たうたくの心こころも劣せう  
アつてゐる事ことあり一ひと扱物あつかひくさるるを聞きハ多おほく女色によいろのことはこれ  
このよして礼義廉恥れいぎれんちハ露つらうもあま又また或あるハ儉約けんやくよ  
利倍りばいの事ことより錐刀すいとうの末すえも争あひ人を欺あざむて己おのれが得えあしき事ことを  
願ねがひ或あるハ奢侈しやうよめりて用度もちどよ苦くるし商人あしんよ向むかへ首くびをこれ其  
人の恩おんを得えて金銀きんぎんもつる是これを物ものもバ門かどを出だき徒者あつちあま  
召具めいぐ一ひと我われハ門地かどぢのちりありして途中ちゆうちゆうより人を追拂おし  
りし家人かじんも飢うして購かひる價あやむ大國たいこくの君きみも亦また大か  
斯かの如ごとく不仁不義ふじんふぎの行いきありて世よの人ひとは誹笑はいせうも知らば世界せかいハ  
いふかゝあまはるる人ひとハ風俗かざうの衰しやうハ無下むげより口惜くちやくきこす

135  
15  
116

常山紀談卷之十終







185  
8  
116

常山紀談

四  
五